

---

# 月の姫と英雄たち

ドラキュラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月の姫と英雄たち

### 【Nコード】

N6881U

### 【作者名】

ドラキュラ

### 【あらすじ】

湿気が支配していた6月から猛暑が支配する7月。

夜となつても誰もがハンカチか日傘を片手に歩く中を一人の娘が歩いていた。

茶色の髪に白い肌と黒より若干だが色の薄い紺色の瞳をした娘・・・  
織姫夜姫。

都内の公立大学に通う2年生で劇団員でもある。

そんな彼女はある日、夢を見た。

三国志の時代に行き、英雄たちから求婚されるといふ夢。

そして自分が戦闘をしている夢だった。

幼い頃からそんな夢は両手で数え切れないほど見て来たが、今回はハッキリと風景などが見えた。

ただの夢だと思っていたが、英雄達に求婚される所は女として憧れる所であった。

そして翌日、彼女は次の劇で着る着物などを一人、徹夜で仕立て上げた。

それを着て着心地などを確かめると……光に包まれた。

『ついに見つけました……我らが姫君』

誰かの声と共に夜姫は意識を失った。

## 序幕：探し求めた姫君（前書き）

彼女と初めて創作した物語です。

傭兵の国盗り物語とは逆に女性が主人公の逆ハーレムがメインで、三国無双をベースにしていますが、ハッキリ言って「どうなんだろう？」と思う程物語が滅茶苦茶です。（汗）

私生活が未だに収集できない状況ですが、今日が投稿する約束の日なのでしますが更新は何時になるのか分かりません！！

破綻擦れ擦れですが・・・頑張って完結させたいと思います！！

## 序幕：探し求めた姫君

湿った霏困気だった6月が終わり猛暑の季節とも言える7月に入った。

今日の気温は34 とかなり高めで、誰もがハンカチや日傘を片手に暑い中を歩いていた。

夜になってもそれは変わらなかった。

そんな大勢の中に織星夜姫という娘が居た。

時刻は午後9時。

今まで自分が居る劇団の事務所に居たのでこの時間に帰る途中だ。

今年で20歳になる夜姫は首都郊外の築年50という古いアパートで一人暮らしをしている公立の大学生2年生。

容姿は茶色の長い髪を腰までストレートに伸ばしており肌が白く黒に近い紺色の瞳と言うのが特徴であるがそれ以外は何の特徴も無い。顔立ちも際立って整えられた訳でない。

丁寧と言うなら平凡で失礼に言うなら平凡過ぎるのだ。

大学での専攻科目は文系であるが、主に古代歴史を題材にしたレポートを提出している。

古代歴史でも彼女が好きなのは三国志演義などで有名な“三国時代”だった。

この時代は“後漢が滅亡してから黄巾の乱、そして西晋によって統一”されるまでの時代の事を言う。

最初に夜姫が三国志と出会ったのは幼い頃に見た三国志演劇だった。幼いながらも劇団の華麗なる演技に眼を奪われたのを夜姫は未だに覚えている。

その時から三国志に興味を抱き始めて読書を初めて部活動に関しても中学、高校、大学と演劇をやってきた。

ただし、高校時代は部員が少ない事もあり事実的に休部という形になったので代わりに弓道部に所属していたが。

いま舞台上で演劇をしているのは彼女が長年の間、やりたいと夢見ていた三国志演劇だった。

だが、中身はまるで違っておりオリジナルの演劇となっているが、何だかんだ言っても三国志を演じる事に変わりはない。

しかし、人生というのは本当に欲しいと願った物ほど手に入らないのが常だった。

心からやりたいと思っていた演劇だったのに役は与えられず裏方に回されたのが良い証拠と言える。

「一番やりたいと思っていた演劇で裏方なんて最悪……」

一人で愚痴を零しながら夜姫は借りているアパートへと帰った。

本当ならば都内にあるアパートを借りたかったが、学費の節約なども考えるとそれも出来ず郊外で安目のアパートを探してここを借りる事にしたのだ。

見た目は築50年の歴史を表す程ボロボロだが、夜姫自身は思いの他にも気に入っている。

人との交流があるからだ。

今の時代、隣人が誰で何の仕事をしているのか？も知らない者が多いのだがここはそんな事もなく困っていれば助ける。

古き良き時代の生き残りと言姫は思っており、そこが気に入っているのだ。

アパートの錆び付いた階段を上り一番端の部屋に行く。

床板がギシギシと鳴るのが最初は怖かったが、慣れてしまえば問題などない。

鍵をポケットから取り出して部屋の中に入った夜姫は畳の上に身体を横たえると溜め息を吐いた。

「バイトも無いし、寝ようかな」

今日は掛け持ちのバイトが全て休みだから、このまま眠るのも悪くは無い。

風呂は帰り道の銭湯で入って来たから問題は無かった。

だから、直ぐに夜姫は眠る事にした。

現実という厳しい世界から一転し、甘美で優しい夢の世界へと逃げたのだ。

翌日、目を覚ました夜姫は変な夢を見た。と大学へと行く道を歩きながらぼやいた。

「変な夢を見たな………」

何処かの戦場に自分は立つており、敵と戦う夢が最初でそこからタイムスリップして三国志の時代へと行き、そこで三国の英雄たちから求愛されるという夢が次だった。

魏、呉、蜀、そして何との董卓などの武将達までもが現れて自分に求婚してくるといふ荒唐無稽な夢物語だった。

以前からそれこそ幼い頃から、似たような夢は両手では数え切れなほど見た事はあったが昨夜の夢は以前の夢よりもハッキリと見えたのだ。

風景から人物の顔まで、全てが……

以前ならばやけて見えていたのに、昨夜はハッキリと見えたのが以前とは違う所だ。

「何だか不思議な感じだったわね……でも、過去にタイムスリッ

プするなんて夢物語よ」

夜姫は小さく苦笑した。

その苦笑は何処か諦めの印象を受けた。

自分が三国の英雄に求愛されるような美人かと言われたら答えは否。

茶髪は地毛だが、美容院に通う様な金も無ければ暇も無いし化粧品も必要最低限の物しか買えない。

だから、艶を出したりする事も出来ないし、綺麗な衣服も買えない。

それに姫なら当たり前とも言える事を何一つ出来ない。

歌も出来ないし踊りも出来ない。

夫を陰で支えるなんて力もない。

ましてや自分が剣を取り相手を倒すなど考えられない。

そんな自分に三国の英雄が求愛する訳がないのだ。

「でも、良い夢だったわね」

三国の英雄から求愛されて自分を巡って争いを起こすなど人としては道から外れるが女としては少し懂れてしまう。

男は美女を侍らせたいが女も逆に美男を侍らせたいものなのだ。

「また見れるかしら？」

出来るなら見たいなと夜姫は思いつつ今日の予定を頭に浮かべた。

今日は午前中で終わるが、そこからレストランのバイトと演劇の練習だと軽く落ち込んだ。

アパートを出て歩いて30分。

大学へ到着した夜姫は何時も通り勉強を開始してノートに重要事項を書きながら過ごした。

大学を終えた後はレストランでウエイトレスとして働いて7時に劇団へと足を運びセットの準備を始めた。

これが彼女の日常だった。

劇団の事務所は大学から歩いて10分の距離にあるビルの3階にある。

団員は全員で30人とそれなりに多い方だ。

張りぼてなどが立てられた舞台では数人の男女が台本を片手に演技をしている。

その傍らで夜姫は布と針を持ち衣服を作っていた。

今、彼女が作っているのは絹に似せた古代中国の衣装で女が着る物だ。

裁縫は得意な方だったので全て任されてしまった事に夜姫は内心で泣きながらも針を動かした。

『何で他人が着る服を私が………』

心の中で愚痴を零しながら夜姫は糸を布に通して縫い続けた。

これを今日中に仕上げなければならぬから大変だ。

数日かけてやっと半分が完成したが、このままだと………

『徹夜を覚悟した方が良いわね』

今日中に仕上げないと団長に怒鳴られるし、他の団員からも色々と言われる。

それは……一番、嫌だった。

結局、彼女が服を作り終えたのは午前2時だった。

他の団員は既に帰っていて居るのは夜姫だけ。

「はぁー、やっと終わった」

夜姫は満足気に溜め息を吐いた。

周りを見ても直す所はない。

完璧な仕上がりだった。

「・・・一回だけ着てみようかな」

本来ならこれを着る相手が着て確認するのだが、元を正せば自分で作った物だし着心地は大丈夫なのかも知りたい。

夜姫は着ていた洋服を脱いで縫い終わったばかりの衣服を着た。

モデルは北方民族の満州族と漢民族の民族衣装だ。

色は高位の者が着る事とされていた濃紫だ。

衣服に袖を通して首に掛けたネックレスを下げた。

元はシルバー色だったのだろうが、永い時の中で色あせて鈍った光を放っていた。

次に薄紫の帯、桃色の簪を垂れ下げた茶色の髪に差し、最後に薄い透き通った色の羽衣を肩に掛けた。

「後は扇を持って」

夜姫は最後に羽扇を持った。

「これを昔の姫は着てたんだ」

資料を元に考えて試行錯誤の末に作り出した服を着て夜姫は、自分の出来に満足しながら満足するまで衣装を着ていた。

そしてそれを脱ごうとした時だ。

突然、部屋中が光に包まれた。

「え？な、なに」

突然の光に夜姫は怯えたが身体が動かずに光に飲み込まれた。

意識が薄れて行き、強制的に手放してしまう時だった。

『やっと見つけましたぞ・・・“我らが姫様”・・・』

□

誰かの声がしたがそれを夜姫は聞けずに意識を完全に失い光に飲み込まれた。

暫く光は輝いていたがやがて小さくなって行き、最後には消えてしまった。

光が消えて無くなると夜姫の姿は何処にも見当たらなかった。

序幕：探し求めた姫君（後書き）

主人公の年齢が20歳だったのを2歳も年上にしてしまいました。  
（汗）

彼女に見つからなかったから、今の内に直します！！

第一幕・三国志の英雄（前書き）

えー、長らくお待たせしました。

とは言っても、何だか自信がありません。（汗）

傭兵の国盗り物語もやっと書き始めたのですが、こちらが先に出来たので載せて置きます。

しかし・・・急展開過ぎたかな？

## 第一幕：三国志の英雄

劇団の事務所で光に包まれて意識を失った夜姫だったが額に感じる冷たい感触で目を覚ました。

「あれ？」

眼を開けたのだが、周りは見えずに暗い。

「……どういふこと？」

眼が見えない事に疑問を感じながら下から来る感覚でベッドに寝ていると理解できた。

そしてまた幼い頃から見ていた夢をみたな、と思い出す。

何処かの戦場と思わしき場所に自分は立っていた。

姿形はボヤけて見えなかったが、言葉だけは覚えている。

『我は神々にも名を知られる者。

行く手を阻む者は何人たりとも殲滅し灰も残さず焼き払う。

その眼に、その耳に、我が名を刻め。

死に逝く者よ。

我が名をその胸に刻み、死出へと旅立つが良い。

我が名は………。

月国の主にして、月国の舞姫なり。

さあ、参れ。死に逝く者達よ。

一撃で骨も残さず楽にして進ぜよう』

この言葉を夢の中で自分は口ずさんだ。

まるで台本を暗記したかのようにスラスラ口にしていた。

だが、ただ台本を暗記して言うのは簡単とも言える。

台本の内容の場面に応じて感情を露わにしたりする事が難しいのだ。

時には唾を吐き、時には涙を流して台本に書かれた言葉を言い相手に訴える。

それが演劇をする者なのだ。

あの台詞を言っている自分は威厳を持ち、相手に自分の事を知らせるように言っていたのだ。

正しく演劇をする者だった。

しかし、そこからは覚えていない。

名前の部分も覚えていない。

だが、今回もハッキリと見えたのだ。

それだけは言える事だった。

『何て名乗ったんだろう？いや、その前にどうして目の前が暗いの？眼は開いているのに……』

一度に二つの事を考えて夜姫は混乱し始めた。

「おお。気が付いたのですか？」

そこへかなり歳をとった男の老人の声が聞こえた。

夜姫は声がする方向を振り向く。

「御気分はどうですか？ “天の姫”」

「天の姫？」

夜姫は理解できずに首を傾げた。

「はい。ん？眼をどうかしましたか？」

老人が歩み寄る気配を感じ夜姫は身を構えた。

誰だって目も見えない状況で誰かが近づけば、それこそ男なら身構えをする。

「何もしません。わしは典医です」

安心させるように言いながら老人は夜姫の両眼を見て、完全に視覚が無い事を瞬時に悟った。

「・・・少し待っていて下さい。直ぐに戻って来ますから」

夜姫に言くと老人・・・典医は部屋を出て行った。

一人となつた夜姫は耳を澄ませた。

外の様子が聞こえて来る。

何やら騒がしく男たちだけの声だった。

『どうしたんだらう?』

自分の眼もそうだが、この騒がしい状況は何なのだろうか?

劇団の事務所は都内から離れているからそんなに騒々しくはないし、夜姫が仕事を終えた時間は既に皆、寝ている時間帯だ。

こんなに騒々しかったら近所迷惑だと誰かが怒鳴るだらう。

『というか、急いで帰って衣装を戻さないと団長に怒られちゃう』

夜姫が所属する劇団の団長は劇に対しての情熱は半端ではない。

だが、お世辞にも演技が上手いのか?と問われると……

それを本人も分かっている事だ。

それでも演劇に対する情熱は冷めないから性質が悪いと言えば良いだらうか?

その苛立ちを劇団員にぶつけるのだ。

特に夜姫は格好の的らしく、何かしら理由を付けては怒って来る。

仕立てた服を着るのだって本来ならご法度だ。

もし、知られたらどんな事を言われるか分かった物じゃない。

最悪の場合・・・劇団を追い出される可能性だってある。

それは避けたい。

そのため夜姫が慌てるのも無理は無かった。

そんな事を考えていると、天幕が開けられて誰かが入って来る気配を感じた。

そしてその誰かは近づいてきた。

「目が覚めましたか？天の姫」

先ほどの典医と名乗った老人より、20から30は声が若い声だった。

「あの、どちら様でしょうか？」

夜姫は戸惑いながらも男に名を訊ねた。

「これは失礼いたしました。私の名前は劉備。字は元徳です」

劉備元徳と言う名前を聞いて夜姫は驚愕した。

『三国志の英雄じゃない!』

幼い頃から蜀の劉備を尊敬していた夜姫は驚いた。

蜀の劉備と言えば演技では主役だ。

滅亡した漢王朝を復興させる為に立ち上がり魏・呉に比べれば国力が遥かに劣る蜀を守り続けた英雄中の英雄だ。

そして義理などにも厚い人物だからこそ、彼の下に關羽を始めとした者達が集まったのだ。

「どうかなさいましたか？天の姫」

劉備が夜姫の驚いた表情に、どうしたのだと訊ねてきた。

「あ、い、いえ。あの、天の姫とは………?」

「貴方の事です。空から落ちて来たので」

「空から落ちて来た?」

夜姫は首を傾げた。

「ええ。我らの陣まで迫った敵を追い払って戻ろうとした時です。突然、光が周りを囲みました。何の事か分かりませんが、光が消えると空から貴方が落ちて来たのです」

「………」

どういふ事だと夜姫は思うが劉備は話を続けた。

「空から落ちて来た貴方を受け止めると、見た事も無い生地で作られた宮廷衣装を着ていました」

きつと天の姫が我々を応援に来たのだと諸葛亮が言い手厚く看病するようにと言ったそうだ。

今いる場所は“反董卓連合軍”の陣にある劉備達が居る陣だと説明を受ける。

反董卓連合軍・・・三国志の中では稀代の悪人と称される董卓を討伐する為に組織された連合軍だ。

董卓は字・・・実名以外の名前は仲穎ちゆうえいと言い、辺境の將軍でしかなかったが後に軍事を強め政治混乱に乗じて漢王朝第12代目の“靈帝”の息子である“少帝”を排除し少帝の異母兄弟である“獻帝”を擁護し政治を牛耳った男だ。

中国では最大の罪である墓荒らしをした、と歴史書には書かれているがそれは魏を建国した曹操もやった事だ。

少帝を排除し獻帝を擁護したのも彼なりの考えがあっただからだろうと夜姫は推測している。

だからと言って彼が清廉潔白だったとは言い難い。

捕虜を皆殺しにした、長安の女中を陵辱したなど数えたら切りが無い悪行を彼はして来た。

演技でも正史でもボロクソのように蔑まされている・・・されるだけの事はして来たし野心もあっただろうが、彼だけがまるで悪者

のように書かれるのは余り良い気持ちではない。

話を戻すと、稀代の悪人として後世では知られている董卓を討伐する為に組織されたのが反董卓連合軍だ。

董卓の非道ぶりに反発した橋瑁が各地に兵を起こすように手紙を出して集まったのが始まりとされている。

袁紹、袁術、曹操、孫堅などを始めとした者達が軍を率いてその数は正確には不明だが十数万はあったとされている。

「本来なら総大将の陣が良いと思ったのですが、まだ気絶している貴方様を動かすのはどうかと思ひまして……………」

「……………」

劉備の説明を夜姫は無言だったが、その間考えていたのだ。

顔が見れないし、声だけで全て判断しなければならぬ。

劇団の悪戯か？と思ったが、夜姫が知る限りこんな声の持ち主は劇団員には居ない。

それにどうも雰囲気が違う。

ハッキリとは言えないが、何かが違うのだ。

それに反董卓連合軍には目の前の人物……劉備玄德は参加していない。

しかし、目の前の人物は嘘を吐いているような口調ではない。

となれば・・・・・・・・・・短い思考の末、一つの答えに導かれた。

『タイムスリップ・・・・・・・・じゃなくてパラレル・ワールドに来たの?』

小説や映画でよく地球とは違う別の世界に主人公が行く設定がある。

それが自分に起きたと夜姫は思った。

それとも夢に見た事が現実と化したのか?

眼が見えない以上、信じられない。

しかし、もしも本当だとしたら大変な事だ。

「如何なされたのですか?天の姫。先ほどから黙っておりますが?」

劉備は心配そうに夜姫に話し掛けてきた。

「い、いえ。私も突然の事で気が動?してしまいました・・・・・・・・・・」

夜姫は咄嗟に言い訳をした。

言い訳をした所で事態が回復したり打開できる訳など無い。

「左様ですか。先ほど会いました典医から眼が見えないと聞きました。大丈夫ですか?」

「眼が見えていたのに突然、見えないので少し不便です」

正直に夜姫は答えた。

何故、眼が見えないのかは不明だが何れは戻るだろうと楽観的に考えていた。

「お察し致します。ですが、安心して下さい。きっと眼は見えるようになります」

『この人は本当に優しい人ね。だから、色々な人たちが集まったのも理解できるわ』

目の前の人物が本物かどうかはさておき、とても心が優しい人物と言ふ事は確信できた。

本物でないにしろ、この人物の下には色々な人物が集まるだろうと夜姫は思いながら劉備の気持ちが籠った暖かい言葉に礼を言った。

「ありがとうございます。劉備様」

「天の姫から礼を言われるとは・・・この上ない名誉です」

劉備が笑った気がした。

「まだ、自己紹介がまだでしたので名乗らせて頂きます。私は織星夜姫と言います。劉備様。次からは夜姫と呼んで下さい」

尊敬している劉備から名前を呼ばれたいと夜姫は思い自分の名を口にした。

「・・・織星夜姫。良い名ですね。分かりました。恐れ多い事ではありますが、夜姫様と呼ばせて頂きます」

「はい。劉備様」

夜姫は笑って見せた。

上手く笑えたか分からない。

それに欲を言えば様付けで呼ばれたくはなかったが・・・

劉備は夜姫の純粋な笑みに心が癒されるような気持ちになった。

今は乱世だ。

誰もが己の名を、地位を、高めようと躍起になり戦争を引き起こして民達を苦しめている。

劉備自身、この乱世を利用して名を上げたいという気持ちはある。

しかし、それ以上に滅亡した漢王朝を復活させて民達を護りたいという気持ちの方が遥かに強い。

だが、現実はいかにも厳しい物だ。

黄巾の乱の時も義勇軍として自分は参加したが、何処に行っても蔑まされた。

ここへ来てもそれは変わらなかったが諸葛亮の機転が働き追い返さ

れる所を、やっとの思いで一陣を任せられた。

とは言っても、陣とは名ばかりで大して価値の無い場所を任せられただけだ。

それが劉備には悔しくて我慢ならなかったが、それを兵達に悟らるゝては士気に係わる事を懸念して必死に押し隠した。

それが原因で心が荒んで行つたが、夜姫の純粹な笑顔を見ると・・・不思議と胸の中で燻っていた物が綺麗に洗い流された気がした。

『・・・この方の笑顔は不思議な力があるな』

劉備は眼が見えない夜姫を見ながらそう思った。

「おお。玄德殿。居たのですか？」

そこへ先ほどの声の主、典医が入って来た。

「はい。いけませんでしたか？」

「とんでもない。貴方様なら天の姫に不埒な真似はしないと確信しておりますから。それはそうと先ほど諸葛亮様に天の姫が目覚めた事を伝えました」

時期に各々くると典医は劉備に告げた。

「そうですね。夜姫様。もう直ぐ、私の仲間が来ます」

「と言うと、諸葛亮孔明様達ですか？」

「ええ。皆、心優しい人物達ですので安心して下さい」

劉備は安心させるように優しい声で言ったが、ドスドスと大きな音を立て近づく音が無数に聞こえて来ると、やはり不安になって来る。

「あ、あの劉備様」

「如何しました？」

「あ、あの、手を……」

劉備は夜姫に言われるままに手を出す。

夜姫は勘を頼りに劉備の手を握った。

「そ、傍に居て下さい」

大勢の者が来ると聞いて怖がっていると思った劉備は優しく夜姫の手を握ってやった。

「ご安心ください。誰も夜姫様を傷つける者はありませんから」

「殿は天の姫に氣に入られたようですね」

典医が笑う声が聞こえた。

その時、バサツと大風が吹いたように夜姫の髪が靡いた。

「天の姫が眼を覚ましたって本当か？兄者！！」

大きな声がして夜姫は思わず劉備の手を強く握った。

「益徳つ。大声を出すな!!」

劉備は夜姫の様子を見て来た人物に厳しい声で叱咤した。

『益徳は張飛の字だったから・・・張飛様か』

夜姫は劉備の手を握り背中に隠れながら、来た人物の字を聞いて張飛と推測した。

劉備の義兄弟の一人である張飛。

義兄として慕う関羽と並び名立たる武将として有名ではあるが酒癖が悪い上に部下の扱いも些か不慣れな事もあり最後は部下に寝首を掛けて殺された。

「わ、わりい。兄者」

益徳と呼ばれた声の主は怯んだ声を出して謝罪した。

「兄者の言う通りだ。少しは声を抑える」

益徳と呼ばれた男の声より幾分か落ち着きがあり貫禄もある声が聞こえた。

「雲長よ。諸葛亮はどうした？」

『雲長って事は関羽ね』

劉備の義兄弟であり、類い稀なる武勇と義理堅さから曹操など敵側の人間からも称賛された人物だ。

その半面で学問にも精通していた事もあり学問の神としても崇められている。

また髭が立派な事もあり「美髯公」と演技では呼ばれている。

劉備は雲長と名を呼び蜀の軍師、諸葛亮孔明の名を言った。

「あの、劉備様。いま話しているのは、関羽様ですか？」

夜姫は眼が見えない事に苛立ちを少し感じながらも確認する為に訊いた。

「ええ。今いるのは、私の義弟で張飛と関羽です」

「兄者。天の姫はどうしたのだ？」

関羽が劉備に夜姫の様子に何かを感じ訊いた。

「それは私が説明します」

典医が関羽の質問に答えようと口を開いた。

典医から夜姫の眼が見えない事を聞かされた二人は驚いた。

しかし、夜姫にはその表情も分からない。

「前までは、見れていたんですけどね」

夜姫は小さく苦笑した。

その笑みが何処か儂げであるのを二人は見逃さなかった。

「失礼します。ご気分は如何ですか？天の姫」

部屋の中に、もう一人だれか入って来た。

声は関羽、張飛より弱いが男の声であった。

「来たか。諸葛亮」

劉備が言った人物に夜姫は、諸葛亮孔明が来たかと判断できた。

諸葛亮孔明は、劉備亡き後の蜀を支えた人物とされており天才軍師と言われているが、どちらかと言うと後方支援などの官僚的な面で力を発揮している、と夜姫は調べた事を思い出した。

「初めまして。天の姫。私は諸葛亮孔明です」

諸葛亮が羽扇を仰ぎながら頭を下げる音が聞こえた。

「は、初めまして。織星夜姫です」

緊張しながら夜姫は声のする方向に頭を下げた。

「夜姫様ですか。良い名前ですね」

諸葛亮が羽扇を仰ぐ音を聞きながら夜姫は顔を上げた。

「っ！！まさか、貴方様、眼が……………」

「そつだ。諸葛亮。夜姫様は眼が見えない」

劉備の言葉に諸葛亮も二の次が繋げなかった。

「典医殿。失礼ですが夜姫様の眼は」

諸葛亮は、典医の方に視線を向けて訊ねた。

否……彼だけでなく、その場に居た者達全員が典医に視線を向けた。

「本人の前では言い難いのですが、恐らく……………」

最後まで典医は言わず口を閉じた。

「……………」

夜姫は無言になった。

典医の無言は先が言えないのだ。

つまり……………」

「もう、眼が見えないのですね」

夜姫の言葉に典医はまた無言で答えた。

眼が見えない。

それは大好きな劇も見れないし出来ない事を言われたようなものだった。

誰もが口を開けなかった。

特に劉備は、必ず眼が見えるようになると励ました。

それなのに眼が見えないと典医が無言で言った以上、哀しみが倍になった。

誰もが何と言えば良いか分からずに無言で居た。

やがて重い空気が場を支配し始めたが、思わぬ人物がその空気を吹き飛ばした。

「大丈夫です。眼が見えなくても、人は生きていけます」

本当は絶望の淵に陥っていたが、敢えて明るい口調で夜姫は言った。

「夜姫様……………」

劉備達は眼が見えないのに明るい声を発した夜姫に視線を向けた。

空虚な瞳でありながらも声は何処までも前向きな声だった。

「劉備様は先ほど言ったではないですか。必ず眼が見えるようになる」と

「ですが……………」

「眼は見えるようになります。根拠は、ありませんが見えるようになります」

典医が言ったとしても、この世は不思議な事がある。

奇跡という不思議な事が……………」

だから、眼が見える可能性は決して捨てられない。

夜姫はそう言った。

誰もが、その言葉に言葉を失った。

ここまで前向きに生きようとする女性を見た事がない。

眼が見える者が何も言えないのに、眼が見えない者がこんな言葉を言うのだから言葉を失うだろう。

『なんて健気な』

劉備はギョツ、と夜姫の手を握った。

「そうですね。必ず眼は見えるようになります」

夜姫の手を握り締めながら劉備は自分の心に叱咤し、また夜姫を励ますように言った。

「わしも出来る限り眼が見えるように努力いたしましょう」

典医は己の諦めの速さを恥しながら夜姫の眼を治してみせると誓った。

まだ自分が知らない薬や治療法があるかもしれない。

それを見つけて出して治すのだ。

「・・・天の姫。この私も及ばずながら、力を貸しましょう」

諸葛亮が夜姫に近付き膝を着いた。

「天下に名を轟かす諸葛亮様が力を貸してくれるのは、心強いです」

夜姫は頬を綻ばせて笑った。

その笑顔は、儂くて、脆い笑顔だった。

『この娘を汚してはいけない。何かあるうと、助けなくてはならない』

誰もがそれを思い、決意した。

ここから、織星夜姫の人生は大きく変わる事になった。

**幕間：義勇軍と連合軍（前書き）**

長らくお待たせしました……

どうも、実在した人物を描く事が難しいと言う事を嫌なほど痛感します。

本当に完結できるのか不安です。

とは言え、頑張りたいと思います!!

## 幕間：義勇軍と連合軍

私は典医殿に後の事を任せて諸葛亮達を伴い陣から出た。

もう既に空は暗くなり兵たちは炊き出しをしている所だ。

「・・・殿。これからどうなさいますか？」

諸葛亮が何も言わずに前を進む私の背に控え目な声で話し掛けて来た。

「夜姫様の事か」

「はい。夜姫様には言いませんでしたが・・・先ほど袁紹様達から催促が来ました」

天の姫は目を覚ましたのか？覚ましたのなら会わせる・・・・・・・・

「どうせあいつ等の腹は同じだぜっ。天の姫を自陣に入れて他の奴等に対して牽制する腹だ！そうに決まっている！！」

益徳は夜だというのに大声で断言した。

それを聞いた兵たちが驚きこちらを見てきた。

「益徳。大声を出すな。我々は何処から見られているか分からない」

私はそれを見てから益徳を戒めた。

我々、義勇軍は他の将達から見れば「お荷物」と見られている。

義勇軍とは聞こえが良いだろうが、所詮は寄せ集め。

装備もバラバラだ。

士気だって高いとは言えないし連携も取れていない。

追いつく事も出来たが、それでは何かと面倒だと思い……こんな何の価値も無い場所を任されたのだろう。

そして何かしら問題……そうでなくても、内通者が居る可能性も捨て切れない。

こんな事を言われてはどんな言い掛かりを付けられるか分からないからこそ、益徳を素早く戒めたのだ。

何の価値も無い陣を任されたが……夜姫様が来てから事態は一変した。

3日前まで誰も来なかったこの陣だが、今では大勢の将達が来るのだ。

手には色取り取りの絹や酒、黄金などを持って……

理由は簡単だった。

天の姫に会い……自陣に引き込む為。

天の姫を自軍に引き込めば、連合軍の中でも顔が効く。

連合軍とは名ばかりの存在で誰もが何かしらの欲を持っており、誰かしらを敵視している。

そんな中に夜姫様は降り立ったのだから・・・不幸としか言えない。

だからこそ・・・私が・・・私たちが護らなければならないのだ。

改めて自分に言い聞かせると、今も遠くからでも分かる程の人数が近づいて来ているのが暗闇でも見えた。

「・・・総大将、勢ぞろいか」

まさか全員が来るとは思いもしなかったから私は少なからず驚いた。なぜ全員が総大将と分かるのだ？と言われたら贅が掛った鎧と駿馬に乗っているからだ。

「殿。どうなさいますか？」

「まだ夜姫様は起きたばかり。あんなに大勢で来られては迷惑だ。追い返す」

「しかし、それでは・・・」

諸葛亮は何かを言おうとした。

この男もまたあの場で決意した筈だが、あくまで立て前として言ううとしていいのかもしいし確認の為かもしれない。

「構わん。もし、これで出て行けと言つのなら出て行く。ただし、夜姫様を護るのは変わらない」

「へっ。昔の兄者みたいだ」

益徳が愉快そうに笑った。

「それでこそ兄者です」

雲長もまた私の態度を称賛した。

「どうやら、今の私は腑抜けだったのかもしれない」

昔なら・・・相手が誰だろうと一歩も引かずに・・・寧ろ気に入らなければ首を切り落としていた。

だが、今は相手の顔色を窺うようになっていた。

しかし、今は違う。

私は目の前まで来た人物達を見上げた。

「劉備よ。天の姫は目を覚ましたか？」

4人の中で一番歳若い袁術様が馬上越しに訊いてきた。

袁術様・・・字は公路（くわじ）だ。

名家である“汝南袁氏”の当主であった袁逢（えんほう）様の息子。

同じ父を持ちながら母親は違う袁紹様とは異母兄弟になるが兄弟仲は決して良いとは言えない。

そして性格も俠人である私から言わせれば最悪だ。

それでも私は目の前に立つ袁術様の質問に答えた。

「目は覚ましました」

それを聞いて4人は馬を進めようとしたが雲長と益徳によって止められた。

「何の真似だ？」

袁術様が今にも剣を抜く勢いで私に訊ねてきた。

私の話を最後まで聞かないで行こうとしたからそうなるのだ、と内心で思いながら私は別な事を言った。

「まだ起きたばかりです。ですから通す訳には参りませんし天の姫は突然の事で気が動いております。そんな所へ大勢で行っては身体に障ります」

「確かにそうだな」

袁術殿の異母兄弟であり、袁家の現当主である袁紹様が頷いた。

袁紹様の父は袁術様と同じだが、母親は違うし身分も袁紹様の方が低かった。

しかし、彼の育ての親である叔父の袁隗えんかい様に才能を見込まれ袁家の当主となられた。

この方は私と同じく遊侠の道歩んだ事がある為か私に何かと目を掛けてくれる。

実際この陣もこの方の力で与えられたものだ。

もし、この方が居なければそのまま追い返されていた事だろう。

「時に劉備。天の姫は先ほど目を覚ましたと言うが、何か言っていたのかな？」

「名前を名乗りました」

私は袁紹様の質問に答えた。

織星夜姫。

「それが名か」

「はい。字は言っておりません」

「それは仕方のない事だ。字を教えるのは極親しい者だけ。まして天の姫ともなれば尚更の事だろう」

おいそれと他人に字を教えるは一大事だ、と袁紹様は言い私もそれに納得した。

「確かに」

「その通りだ」

曹操殿、孫堅殿も袁紹殿の言葉に同意した。

曹操殿とは面識が以前からあったが・・・どうも腹が読み切れないので警戒している。

袁紹殿と曹操殿は知り合いらしく仲も良さそうに見えるが腹の中はどうか分からない。

今もお互いに剣を抜かせないように牽制しているように私には見えなかった。

孫堅殿とはここで初めて会うが流石は孫呉の当主だけあって威厳があると思う。

「名が分かっただけでも良い。今日は帰るとしよう」

「それが良いな」

「また日を改めて」

袁紹様が帰ると言う残り2人も帰ろうとしたが、袁術様だけは違っていた。

「天の姫は目を覚ましたのだ。ならば、会っても問題ない」

「袁術様。失礼ですが、貴方様は耳が聞こえないのですか？」

「貴様・・・たかが義勇軍の分際で私を愚弄するか」

「いいえ。しかし、私は先ほど目が覚めたばかりで身体に障ると言いました。それなのに貴方様は行こうとする」

耳が聞こえないと訊いても可笑しくはない、と私は言った。

以前なら・・・苦言を漏らした事だろうが無理に止めたりはしなかった。

止められなかった。

だが、今は違う。

今、下手に合わせでは余計に夜姫様の気は乱れ混乱してしまう。

ただでさえ眼が見えないというのにこんな男を会わせたら・・・

「貴様の意見など知った事かつ。私は行くぞ」

「でしたら、私も・・・力づくでも止めます」

私は腰に差していた剣に手を掛けた。

「この私に刃を向けるのか？」

「如何に総大将の一人と言えども、ここは私が任された陣。その陣で身勝手な行動は許しません」

「ほおう。では・・・貴様を殺してでも行かせてもらおうぞ」

袁術様は剣を鞘から抜いた。

そしてその剣先を私に向けた。

「これが最後だ。そこを退け。そうすれば、今回の事は見逃してやる」

「お断りします」

他の3人は止めようとしたが、私たちの方も引くに引けない。

一触発の・・・もはや何かが起これば戦う気が場を支配していた。

「・・・劉備様。どうかなさいましたか？」

私は声がして振り返った。

そこには典医殿に伴われて居る夜姫様が居た。

暗い中でも分かる程・・・綺麗に輝く“清流のような・・・しかし、妖し気な印象も与える紫が薄く掛った銀の髪”と透き通るような・・・雪のように汚れ一つない白い肌・・・青天のような蒼い瞳は空虚ながらも透き通っている。

そして、その身を包む濃紫の服と装飾品もまた美しい。

だが、そんな物は夜姫様の美しさをただ飾るだけの物であって無くても良い代物に見えてしまう。

「夜姫様。お身体は……………」

諸葛亮が夜姫様に身体の具合を訊ねた。

「少し気持ち悪いので夜風に当たろうと思ったんですが……………お客様、ですか？」

夜姫様の声は透き通った……………瑠璃のように壊れ易い印象を受ける声だった。

その声と容姿に4人は何も言わなかった……………言えなかったのだ。

この世の者とは思えぬ容姿と声。

その身体から放たれる気に……………

ただ一人だけは違った。

「おお、貴方様が天の姫ですか!!」

袁術殿は馬から降りて近づこうとした。

しかし、剣は抜いてあるし掴んだまま。

その声に夜姫様は身を堅くして足を後ろに引いた。

雲長と益徳は直ぐ様、夜姫様に近付いて護るようにして立った。

「貴様らそこを退け。私は天の姫と話がしたいのだ」

「てめえ……どの面でそんな事が言えるんだ？」

益徳が仁王立ちで袁術様を見下しながら訊ねた。

しかし、訊ねるような口調ではなく馬鹿にしている声だった。

「貴様！この私の顔を愚弄するか！！」

「……ッ」

夜姫様の小さな悲鳴が聞こえた。

恐らく袁術様の殺気に気付いたのだろう。

「あ、いや。これは驚かせて申し訳ありません。天の姫」

袁術様は夜姫様が怖がった事に今更気付いたのか取り繕う様に温和な声で喋り出した。

その様子を見て3人は吐き気がする顔をした。

袁家の嫡男である袁術様だが……当主としての器は袁紹様には及ばない証拠だと私は思った。

袁紹様の母君は身分が低い故に本来ならば日の当らない生活を余儀なくされた。

しかし、袁紹様の器に気付いた叔父であり育ての親でもある袁隗様の眼に付き嫡男である袁術様を押し退けて袁家の当主になられた。

それが袁術様には気に入らないのだろう。

連合軍として、同じ総大将でありながら、互いに協力はしないし隙あらば寝首を掻こうとしている。

その為ならどんな手も使うから、他の将達からは好かれていない。

見た目こそ立派だが・・・中身はどす黒い。

夜姫様は眼が見えない・・・しかし、心の眼でこの方の本性が分かったのだろう。

先ほど以上に身を堅くしている。

「その様に怖がらないで下さい。私は袁術。反董卓連合軍の総大将を務めております」

「袁術・・・では、袁紹様の御兄弟ですか」

夜姫様が何故、それを知っているのか？とは皆思わなかった。

天の姫ともなれば下界の事など全て知っている、と私たちは考えていたからだ。

妾の子である袁紹様と腹違いではあるが兄弟という事実。

袁術様は事の他この事実を嫌っているが夜姫様の言葉には嫌な顔せ

ずに答えた。

「左様です。それにしても・・・お美しいですね。いやはや、眼も奪われるとはこの事だ」

袁術様は2人を押し退けて更に近づこうとしたが、典医殿がそれを阻止した。

「恐れながら姫様は些か気分が悪いのです。ですから、これで失礼します」

「すみません・・・」

夜姫様は典医殿の後ろから僅かに頭を下げて謝罪の言葉を口にした。

「いえ。こんな夜遅くに来る我々もまたどうかしております。天の姫・・・いえ、夜姫様。大変失礼しました」

袁紹様が馬上から降りて夜姫様に近付いて謝罪した。

曹操殿に孫堅殿も同じく馬から降りた。

「あの、失礼ですが貴方は？」

「これは失礼した。私は袁紹です。字は本初ほんしよと言います」

「では、袁家の当主様ですか。私は織星夜姫と言います」

「私ごときに名を名乗って頂き光栄に思います」

袁紹様は心から嬉しそうな顔をしてみせたが、夜姫様は見えない。

「それはそうと、この度は我が異母兄弟が夜姫様を怖がらせてしまい大変申し訳ありません」

「いえ。．．．私も、些か気が動？していましたので．．．．．」

「貴方様が気にする必要はありません。突然こんな所へ来ては気が動？するの無理はありません。今夜はゆっくりお休みください。また日を改めて会いに参ります」

「．．．はい」

それだけ言うと夜姫様は典医殿に連れられて戻って行った。

曹操殿と孫堅殿は自己紹介をしなかったが、何か意図があるのか？と私は思った。

その一方で夜姫様が消えてから袁紹様は袁術様を責め立てた。

「袁術。貴様は私に恥を搔かせる気か？」

もうその顔は笑顔ではなく激しい怒りが宿っていた。

「ふん。妾腹の子である貴様など恥で一杯であろうに．．．何を言うか」

「貴様っ」

「お二人とも、ここは双方共に抑えて」

孫堅殿が二人の間に割って入って喧嘩腰の二人を抑えた。

その間、曹操殿はじつと夜姫様の消えた方角を見つめていたが、不意に私に視線を移した。

「劉備殿。失礼だが、天の姫は・・・眼が見えないのか？」

「・・・はい」

私は曹操殿の言葉に頷いた。

このご仁には、どういう訳か素直に従わざる得ない力がある。

そして合理的な考えと敵であろうと実力があればそれに似合う報酬などを与える為、人が集まる。

だからこそ、魏という巨大な国を作り上げる事が出来た上に袁紹様と肩を並べられるのだ。

「そうか。何か可笑しいと思っていたが、眼が見えんとは・・・  
・戻るのか？」

「・・・戻りません」

私はこれも正直に答えた。

「以前は見えていた、と言つのですがここに来てからは見えなくなつたと」

「何と・・・・・・・・・・」

私の言葉に曹操殿達は愕然とした。

「しかし、夜姫様はこう仰いました」

世の中には不思議な事がある・・・奇跡という不思議な事が。

「その時、私は誓ったのです。どんな状況であろうとあの方を御守りすると」

「なるほど。だから、何時もなら引き下がる所でも引かなかったのか・・・・・・・・・・？」

「はい」

「惚れたか？」

曹操殿は何処か面白がる顔で訊ねてきたが私は毅然とした態度で答えた。

「惚れたとは違います。ただ、純粹に弱い娘を護りたいという気持ちからです」

「そうか」

意外にも曹操殿はそれから何も言わなかった。

だが、その何も言わなかった事に対して・・・嫌な予感がした。

それが何なのかは分からないが。

「では、今日は失礼する。後日また窺うとしよう」

そう言つて4人は帰つて行つた。

「殿。厄介な事になりましたね？」

諸葛亮が扇で顔を覆いながら私に言つて来た。

「ああ。しかし、我々の決意は変わらん。そうであるう？」

「ええ。ですが・・・何か策を打たなければなりませんね」

あの様子では4人揃つて何か一物抱えている、と諸葛亮は言った。

「ふんつ。あんな奴等、俺が全員皆殺しにしてやるよ」

益徳が息も荒々しい感じで断言したが、私を咎めたりはしなかった。

もし、夜姫様に害を与えるなら・・・皆殺しも辞さない。

それが私の気持ちだった。

## 第二幕：総大将の提案

天の姫こと織星夜姫が来てから既に7日が経過した。

総大将の4人が直接、対面した事で噂・・・真実は広まった。

天の姫が降り立った。

この真実は瞬く間に広がり興味本位で訪れる兵達が続出した。

夜姫が居る陣内も例外ではなかった。

ただし彼等は他の兵達と違って興味本位ではない。

夜姫は眼が見えない。

それを典医は皆に伝えた。

普通なら伏せて置くのだが何れは知られる。

それを理解していた典医は先手を打ち教えて要らぬ揉め事などを先に解決させたのだ。

それと同時に皆の協力を期待した。

これは当たりだった。

典医の説明を受けた兵達は出来る限りの物を用意した。

ここで手に入る眼が治る薬や魚などを用意しては夜姫に差し出し始めたのだ。

それ以外にも前以上に勇敢に戦うようになった。

前まではただ敵が来たら追い払うだけだったが、今は敵が来なくてもこちらから攻めて行く。

その真意はただ同じ。

眼が治って欲しい……………

自分達は義勇軍。

お荷物と言われ馬鹿にされている。

その証拠がこの陣だ。

何の価値も無い不毛な場所。

こんな所を護れと言われても、やる気もへったくれも無い。

だが、そんな自分達の陣に天の姫は来た。

それは自分達を励ます為。

それなのにここに来たせいで盲目となった。

それは自分達が情けないから。

ならば勇敢に戦えば眼は戻る。

戻してみせる！！

これが兵達の心理だった。

根拠がまるで無い。

だが、彼等はそう思う事で自分達を叱咤したのだ。

甘んじていたこの環境に……ぬるま湯に浸かり切って腑抜けとなっていた自分達に。

場所は変わり、天の姫こと織星夜姫が居る天幕。

本来なら白い天幕だが、急ごしらえで用意された為かあちらこちらに綻びがあるし薄汚れているが、義勇軍の陣ではこれでも良い方なのだから文句は言えない。

元々は義勇軍の総大将である劉備玄德の天幕ではあるが、今は夜姫だけの為に使われている。

その天幕を劉備の両腕とも言える関羽と張飛が仁王立ちで護っている。

こうでもしないと変な輩が来るからだ。

つい先ほど袁術の使者と名乗る者が勝手に入り込んで夜姫を連れて行くこうとした例があるから尚更とも言える。

だが、この二人が立つと変な輩は来なくなったから効果は抜群と見て良いだろう。

そんな天幕に夜姫は居た。

「夜姫様。今日はこれを試してみましよう」

典医は簡単に作られた寝台の上に腰を降ろす夜姫に魚の肝を差し出した。

魚の肝は難病に効くという噂がある。

それを聞いた兵の一人が苦勞して手に入れ差し出してきた。

しかし、この肝はとても臭いがきつく簡単に食せる物ではない。

特に歳若い女子などからは嫌悪されている。

それを典医は知っていたので臭いを和らげる薬を使った。

そのため臭いは強くない。

典医はレンゲでスープ状にした魚の肝を夜姫の口に運んだ。

夜姫は口を開け魚の肝を口にした。

そして飲んだ。

「……良薬、口に苦しですね」

一口飲んだ夜姫は言った。

その顔は歪んでいた。

「その通りです」

典医は夜姫が見せる歳若い娘の表情に苦笑した。

「いえ。私みたいな者の為にこんな事を……」

「何を言います。貴方様がここに来てからというもの皆は活気づいております」

貴方様が来る前は誰からも相手にされない事で士気は低下していた、と典医は語った。

「私ごときで役に立てたなら嬉しいです。でも、どうして義勇軍をこんな所へ配置したのですか？」

夜姫自身は既に歴史などを調べてある程度の事は分かっていたが、この時代に生きる典医の口から説明を聞きたいと考えたので敢えて疑問を投げ付けた。

「義勇軍は先に起きた“黄巾の乱”で活躍したのは分かりますか？」

「ええ。劉備様も参加したんですよ？」

「左様です」

典医は夜姫の質問に頷いた。

黄巾の乱とは、中国後漢末期の184年に大平道と呼ばれる宗教の教祖をしていた“張角”が農民達を先導して起こした反乱である。

張角は自身を天公將軍と称し政治腐敗で民衆に対する苛性政を正す為に兵を起こした、と触れ回った。

何故、黄巾と呼ばれるのか？

それは目印として黄巾と呼ばれる黄色い頭巾を頭に巻いた事からこう名付けられた。

この反乱により後漢は衰退し三国の時代へ行く事になるという歴史的にも重大な反乱と言えるだろう。

しかし、反乱途中で張角は死亡し後漢も押し戻して来たので反乱は治まったように一時は見えたが張角が死んでからも自らを張角と名乗り反乱を続ける者が続出した。

これによって後漢の権力は地に落ちたのだ。

話を戻すと、張角亡き後の黄巾は散り散りになって山賊などに身を落とす者まで続出した。

その者達は・・・ここ劉備玄德が指揮する義勇軍にも居ると言う。

「・・・それで、こんな所を？」

「それもあります但实际上の所は皆が自分達の力を誇示する為にここを任せた、とも言えます」

夜姫の言葉に典医は付け足すように言った。

反董卓連合軍は一枚岩ではない。

いや、岩などではなく人々の思惑が嫌と言うほど混ざり合い出来あがった組織だ。

そして少しでも亀裂が入ればあつと言う間に崩れてしまつ危うさを持つ。

「つまり、皆は自分の力で董卓を倒し世間に自分の力を見せつけた。だけど、一人では倒せないから連合軍を作った。でも、皆が疑心暗鬼に陥って役に立たない。そこへ義勇軍と称する・・・押し掛け軍が来た」

ただでさえ前の状態でも難しかったのに、更に義勇軍と称する押し掛け軍まで来た。

しかも黄巾の者も居る。

そんな者達をおいそれと自分の陣へ入れる訳にはいかないし使う訳にもいかない。

だからと言って、下手に追い返すと後々面倒な事になる可能性も捨て切れないから、こんな場所を任された・・・

「その通りです」

「・・・酷い話ですね」

夜姫は余りの現実に吐き気を覚えた。

黄巾の乱に参加した者を入れている劉備が指揮する義勇軍だけではない。

曹操や孫堅だって、他の群雄達も同じ事。

それなのにどうして劉備だけがこんな目に遭っているのだ？と問われたら・・・何も無いから、としか言えない。

劉備は王朝の血筋を引いていると言われていたが明確な証拠は無い。曹操や孫堅などは家柄もそうだが身分もある。

袁術と袁紹は名家の出身。

そこが劉備と違う所だ。

「それが現実という物です。天の姫である夜姫様には・・・我慢できない事でしょうが」

典医は自分のように顔を歪ませる夜姫を諭すように言うと、レンジで再びスープ状にした魚の肝を夜姫の口へと運んだ。

「これを食べたら少し歩きますか？」

「はい。じっと部屋の中に居るのは余り好きではないので・・・」

それに典医は頷いた。

魚の肝を腹に収めた夜姫は右手を典医に預けると左手に棒を持った。

何の変哲もないただの棒だが、夜姫にとっては宝物だった。

何せ劉備玄德が自ら木を削り作った棒なのだから。

左手に棒を持つ夜姫。

その手首には白い布……包帯が巻かれていた。

だが、典医はそれを知らなかった。

典医に手を引かれて天幕を出た夜姫は太陽の眩しい光に見えない眼を細めた。

そしてその後を関羽と張飛が無言で付いて行く。

「太陽の光が気持ち良いですね……」

「そうですね。私のような老人には些か強い気もしますが」

「そうなんですか？」

「ええ。どうも歳をとると色々な事に対して強いと思うのです」

若い頃は出来た事も今は出来ない事は多々ある、と典医は言った。

「夜姫様のご両親はそんな事を言わないですか？」

「・・・私、両親が居ないんです」

夜姫は僅かに間をおいて・・・心を落ち着かせるように答えた。

「両親が居ないとは？」

典医は踏んではいけない所を踏んでしまったと直ぐに悟ったが、下手に話題を変えるのはもつと不味いと思ったのか続きを言った。

関羽と張飛に到っては僅かに顔を曇らせたが、ここは典医に任せようと考えたのか無言になった。

「私、産まれた時・・・一人で泣いていたんです」

雨が降っていた夜、誰も居ない路地で白い布に包まれて泣いていた所を保護された。

それから親と暮らせない子供などが居る施設へ連れて行かれ育てられた、と夜姫は言った。

「でも、周りの子供達は何時もあると両親が来るんです」

手には玩具などを持って子供達に渡して抱き締めたり抱き上げる。

「それを羨ましく思いました。何で私にだけ両親が居ないの？って思いました」

ある時、その長に訊ねた。

『どうして夜姫にはお父さんもお母さんも居ないの？』

これに長は何も言えなかったらしいが夜姫はそんな長にこう言い続けた。

『夜姫が神様にお願いしたらお父さんと母さん来てくれる？夜姫を抱き締めてくれる？』

それを聞いた長は何も言わずに夜姫を抱き締めたらしい。

夜姫を抱き締める長は僅かに身体を震えさせていたらしく、それに夜姫は気付かなかった。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

3人は何も言えなかった。

幼い頃に夜姫が言った言葉は子供だからこそ純粹なのだ。

純粹ゆえに罪を知らない。

それゆえ長は何も言えなかった。

何も言わなかった代わりにその時は自分が親代わりとして抱き締めたのだから3人は推測した。

「・・・今にして思えば、子供の我儘でした」

夜姫は自嘲した。

その歳の娘にしては余りに痛々しい自嘲であり、典医は不味い事を訊いてしまったと自分の不覚に憤りを覚えた。

張飛などは僅かに瞼を赤くさせたが、それを関羽は堪えるように眼で合図した。

「典医様。今日は少し遠くへ行きたいです」

夜姫は典医にお願いした。

「もう少しこの場所を知りたいんです」

「・・・分かりました。夜姫様の望みのままに」

典医は深く一礼した。

夜姫は自分の気持ちを知ったのだろう。

知ったからこそ敢えて遠くへ行こうと言い場を和ませようとしたのだ。

それが典医は痛い程理解できた。

だからこそ夜姫の気持ちを無下にせず敢えて頷き歩き出した。

そんな4人を太陽はまるでこれからの未来を暗示するかのよう神々

しく輝きを放ち続けた。

その一方で劉備玄德と諸葛亮孔明は総大将の陣に呼び出されていた。総大将の陣は全部で4つで、その内の1つ・・・袁紹の天幕に居た。袁紹の天幕は流石は名家と謳われるだけの出だけあって贅が凝らされていった。

自分の天幕とは豪い違いだ、と劉備は思いながら何故呼び出されたのか？と考えたが答えは直ぐに見つかった。

理由は一つしか無い。

夜姫の事についてだ。

「夜姫様を、移動させる？」

劉備は袁紹から放たれた言葉を訊き返した。

「うむ。そなたの陣では何かと不便であろう。それに前のように敵軍が気紛れで来ないとも限らない」

袁紹は至極、当たり前のように言っていた。

的を射ている言葉でもあったため劉備は何も言えなかった。

「そこで考えた結果、総大将の陣に移動させようと考えたのだ」

ここまでが良いか？と袁紹は劉備に確認を取った。

「・・・はい」

劉備は間をおいてから袁紹の言葉に頷いた。

『・・・突然の事で動？しているのだろうか。私も彼の立場だったらそつだからな』

袁紹は劉備の態度を分析しながら、了承するかどうか考えてみた。

夜姫を総大将の陣に移動させる。

これは自分の異母兄弟である袁術が提案した事だった。

『天の姫をあんな馬小屋のような場所に何時まで置いておく気だ？直ぐにでも我が陣へ移動させるべきだ！！』

珍しく現実的な提案だ、とその時袁紹は思ったが改めて考えてみると胡散臭い。

この隣に居る異母兄弟は己が為なら何でもする。

それこそ仇敵とさえ手を結ぶ可能性だつてある位に。

更には自分より目立つ・・・戦功を上げた者に対しては凄まじい嫉妬を抱く。

そんな異母兄弟がこんな提案をするのだから何かしらの思惑があると疑ってしまうのは自明の理と言える。

同じ総大将の曹操、孫堅に関してもそれは同じ事だが少なくともこの二人に関しては袁術よりはまだ遙かに理性的な行動を取ると袁紹は思っている。

曹操とは知り合いであるが、明らかに自分と同じく天下を狙っているのは分かっている。

ただし、まだその時期では無いのか？

力が足りないと自覚している為か余り表立った行動はしていないが油断は禁物だ。

孫堅は袁術の配下にあるが、何時までもこの男が異母兄弟の下に居る訳が無い。

近い内に何かしらの行動を起こす事だろうと、袁紹は見ていた。

他の群雄達にしたって何かしらの考えはある。

『天の姫も厄介な時に、場所に來た物だ』

今の状況は非常に危うい状態だった。

相手は勇名と悪名を同時に馳せた董卓だ。

しかも配下には天下に名を轟かせている呂布まで居る。

こちらは誰もが腹に一物抱えており少しでも亀裂が入ればあつという間に全壊する恐れがある連合軍。

そんな所へ夜姫は降り立った。

それも義勇軍の陣へ。

どうせなら自分を含めた4人の何処かに降りてくれたら良かった、と袁紹は思ったがそんな事を想った所で何も始まらない。

「で、劉備よ。どうだ？」

袁紹はもう一度、劉備に訊ねた。

「私の一存では決められません。如何に私の陣へ降りたと言っても、あの方の意思を無視して移動させるのは……………」

「ふん。そんな事を言っただけはいるが、本音では自分が夜姫様を物にしようと考えているのではないか？」

袁術が人の悪そうな笑みを浮かべながら劉備を見た。

「お言葉ですが袁術殿。そのような考えはこの劉備玄德。一度も考えた事はありません」

毅然とした態度で劉備は答えた。

この身は全て漢王朝の為に、夜姫様の為にある。

この戦いに参加したのも全ては漢王朝の為。

「その私を侮辱しますか？貴方様は」

「侮辱だと？たかが義勇軍風情がこの私に偉そうに」

「止めんか」

袁紹は熱くなり始めた二人を早々に止めた。

「袁術。劉備の気持ちは本心だ。その本心を侮辱するのは私が許さん。もし、またこんな真似をしたら容赦せんぞ」

「ほおう。貴様に出来るのか？」

「出来るとも。使者を装い夜姫様を強引に自陣へ引き込もうとした男なら、な」

「っ！！」

袁術はなぜ知っている？と顔をしたが見れば皆は知っている顔だった。

夜中ならまだしも昼間に行くのだから、どうぞ見て下さいと言って  
いるような物をこの男は気付いていないらしい。

異母兄弟ではあるが情けない、と袁紹は落胆を隠せなかった。

「・・・・・・・・」

袁術は暫く袁紹と劉備を睨んでいたが、孫堅に宥められて怒りを必  
死に抑えた。

「劉備よ。そなたは夜姫様の意思を尊重すると申したな？」

ここで何も言葉を放たなかった曹操が初めて口を開いた。

「はい」

劉備は曹操に視線を移して頷いた。

「ならば、夜姫様をここに連れて来て意見を言わせてはどうだ？ 皆の前で言えば納得もすると思うが」

これに劉備は頷いた。

「確かにそうですね。分かりました。直ぐに呼んで参ります」

「では、殿。私が夜姫様を呼んで参ります」

諸葛亮が自分で行こうとする劉備を留めた。

「では頼む」

「分かりました。失礼します」

諸葛亮は一礼してから天幕を出て行った。

天幕を出た諸葛亮は夜姫を探しに向かったが、その心中は穏やかではなかった。

『不味いですね。こつも早く動いて来るとは……………』

諸葛亮の考えではまだ自陣へ引き込もうという行動は取らずに気を

引こつとする、と予想していた。

だが、実際はもう動いていた。

『・・・不覚です。ですが、まだ挽回できます』

曹操は夜姫の意思を皆に言わせようとしている。

つまり実力行使はせず夜姫の気持ちを尊重するという事。

これなら天幕に戻るまでに夜姫に予め言えば問題ない。

しかし、それは出来なかった。

「諸葛亮殿。我々も行きます」

後ろから声がして振り返れば総大将の部下達が4人いた。

別々の主人だが。

「どういう事です？私が夜姫様に何か言おうと考えているのですか？」

諸葛亮は足を止めて4人に訊ねた。

「そうは言っておりません。ですが、念には念を入れろと言いますからね」

明らかに自分を疑っている、と直ぐに察する事は出来た。

『敵も馬鹿ではない、という事ですか。まあ、ある程度の予想はしておりますが手際が良いですね』

4人揃って抜け目が無い、と諸葛亮は感心を覚えながらも5人で夜姫を探し始めた。

### 第三幕：英雄達と対面

天幕を出た夜姫は典医に連れられて劉備の陣を歩いていた。

眼が見える訳ではないので、何がどんな形をしているのかは分からないが典医は簡単に説明してくれるので想像は簡単だった。

夜姫が来る度に義勇軍の兵たちは皆、動きを止め眼の具合などを訊ねた。

その度に夜姫は変わらない、と答えたが兵たちの気持ちは有り難いと礼を律儀にも一人ずつしていた。

それを関羽と張飛は感心しながらこれからどうなるのか一抹の不安を覚えた。

現在、董卓軍とまともに戦っているのは自分達義勇軍と曹操軍、孫堅軍の3軍だけだった。

誰もが董卓と戦うのを怖がっている。

董卓自身若い頃は武勇を馳せたし、配下の将達もまた実力者ぞろいだ。

そんな董卓軍の中でも一際目立つのは養子である“呂布”の存在だ。字は奉先で元々は遊牧民の出だと言われているが明確な出自は不明である。

ただし、常人とは思えない腕力を誇り弓術・馬術共に優れている事。

また主人を平気で裏切る事は分かっている。

元の主人を董卓に唆されて首を切り持って行ったのが良い例だ。

前の主人は彼を親愛していた、というのに………

そんな敵軍と進んで戦おうとする者達は殆ど居ない。

しかし、夜姫が来てからは大きく変わった。

皆が夜姫に良い所を見せようと……自軍を頼るように仕向けている。

彼等は金銀などを差し出しながら自分の勇敢さなどを夜姫に言っ  
て聞かせ売り込んでいる。

もちろんそんな事は全て退けているが、これからどうなるかは誰に  
も分からない。

「なあ、関兄。義兄者はどうしているんだ？」

張飛は小声で関羽に訊ねた。

「分からん。だが、嫌な予感はするな」

関羽は自慢の髭を撫でながらも義兄である劉備が総大将の陣へ呼び  
出された事に不安を感じていた。

「まったく。どうしてこども俺らには運が無いんだか」

「そう言うな。必ず我々にも運は向いて来る。天の姫である夜姫様が来たのが証拠だ」

「そうだけだよ……ん？」

張飛は関羽の言葉に納得したが、何かを見たのか眼を細めた。

「どうした？」

「諸葛亮が来るぜ。……しかも、総大将の部下4人と一緒に」

「……夜姫様、私の背に隠れて下さい」

関羽は典医と夜姫を自分の背中に隠すと張飛と共に仁王立ちして近づいて来る5人を見た。

他の兵達も現れた諸葛亮を除く4人に不審な視線を送った。

「関羽様。張飛様。夜姫様は？」

諸葛亮は扇で顔半分を隠しながら関羽に訊ねた。

だが、その仕草で2人は何か遭ったのだ、と理解した。

諸葛亮が扇で顔半分を隠すという事は何かが起こった、という事を意味している。

「私は、ここです」

大きな関羽の背中から夜姫が僅かに顔を出した。

「夜姫様。実は、殿が呼びしているのですが大丈夫ですか？」

「劉備様が？」

「はい。詳しい事は行きながら説明しますので宜しいですか？」

「分かりました」

夜姫も諸葛亮の声に何かを感じたのか僅かに身体を堅くしながら頷いた。

「では行きましょう」

諸葛亮と4人は夜姫たちを先導して歩き出した。

「典医様。劉備様に何か遭ったのでしょうか？」

夜姫は典医に不安そうな声で訊ねた。

「恐らくは。ですが、殿なら大丈夫ですよ」

典医は夜姫を安心させるように言ったが、その心は不安だった。

恐らく夜姫の事でまた問題が発生したのだろう。

しかし、それを夜姫に言えば彼女の心は痛むだけ。

それは眼の治療にも負担が掛るから敢えて言わなかった。

天幕に行くまで諸葛亮は夜姫に大まかな説明をした。

夜姫は自分を置いてそんな話に進んでいる事に驚いていた。

同時に自分の意思は？と思った。

「私の意思は・・・無いんですか？」

「それは問題ないと思います」

諸葛亮は夜姫の疑問を打ち消すように断言した。

「夜姫様は天の姫。貴方の意思を蔑ろにするという事は天に弓を引くも同然。誰もそこまで愚かな真似はしません」

これには総大将の部下4人も頷いた。

「・・・・・・・・・・」

夜姫はこれに何も言えなかった。

自分は天の姫などではない。

ただの大学生だ。

それなのにこんな状況になるとは・・・・・・・・・・

『どうなるのかしら・・・・・・・・・・？』

夜姫は自分の人生はどうなるのか、と自問自答したが明確な答えは見つけられずに黙るしかなかった。

それから歩き続けて暫く経つと袁紹の天幕に着いた。

眼で確認する事は出来ない夜姫だが、劉備の陣に比べてかなり規模は大きいという事だけは人の声や馬の蹄音で確認できた。

天幕の左右には槍を持った屈強な兵2人が立っていた。

しかし、夜姫を見ると直ぐに天幕へと案内された。

「殿。夜姫様をお連れしました」

諸葛亮が直立不動で立っていた劉備に報告した。

「ご苦労であった。夜姫様、貴方の足を煩わせて申し訳ありません」

劉備は諸葛亮を労いながら夜姫に詫びた。

「いいえ。私のような者を劉備様は面倒を見ているのですから、この程度は……」

典医に右手を預けた夜姫は僅かに曇った顔をした。

「びびり……」

「いやー、流石は天の姫だ。こんな義勇軍の長に対しても優しいですね」

劉備が訊こうとしたが、それを押し退けるように袁術が割って入った。

そして劉備を侮辱した。

「んだとこらー!」

張飛が袁術の言葉に怒りを露わにしながら掴み掛ろうとした。

それを関羽は思い留ませたが、厳しい視線を袁術に送り牽制した。

「袁術様……………」

夜姫は袁術の名を呼んだ。

「何でございましょうか？夜姫様」

袁術は夜姫に名を呼ばれて嬉しそうに訊ねてきたが、夜姫自身の顔は強張っていた。

「どうなされたのですか？そのように顔を強張らせて……………」

袁術は夜姫がなぜ顔を強張らせているのか理解できずに訊くと夜姫は小さな声で、しかし、ハッキリと言った。

「…………劉備様に謝って下さい」

「劉備に謝れとは？」

袁術を始めその場に居た者達は夜姫が何を言いたいのか解からなかった。

「劉備様は確かに義勇軍の長です。貴方様のように名門の出はありません。ですが、それでも軍を率いてこの戦いに参加しました」

それは少しでも貴方様達の役に立ちたいが為。

「それを蔑むのは道理に反しておりますし相手に失礼です。謝って下さい」

「い、いや、しかしですね……」

「私は謝って下さい、と“お願い”しているんです」

尚も食い下がろうとする袁術に夜姫は強い口調で言った。

しかし、言葉はお願いとしていた。

「それとも袁術様は……私のような小娘のお願いは聞けないのですか？私を小生意気な女だと思えますか？それで御不快な思いをなさったなら、私を鞭で打つなり剣で斬るなりして下さい」

夜姫は本心で言っているかのように悲しそうな顔をしてみせた。

しかも、追い打ちを掛けるように怒りたいなら罰を与えろとまで言ってみせた。

この言葉は嘘であるが、袁術に謝罪をさせる為にと夜姫は演技をした。

“流石は劇団員。裏方とは言え良く出来た演技だぜ。おまけに絶妙なスパイスを効かせている所が何とも……”

誰かが言ったが、それは誰にも聞こえなかった。

「い、いえっ。そんな事はありません！！ですから、どうかそのような御顔をなさらないで下さい！！」

袁術は汚い唾を吐きながら夜姫に取り繕った。

夜姫が言った言葉は袁術から言わせれば侮辱に近い。

もし、夜姫がただの小娘なら言う通りその場で斬り殺すなり鞭で叩いていただろうが、夜姫は天の姫だ。

そして美人でもある。

そんな女性を悲しませたとあつては男としての面子に係わる上に印象も悪くなってしまう。

現に自分を除く男性全員から非難の眼差しを受けているのが良い証拠だ。

『な、何としてもこれ以上の事は避けなければ！！』

袁術は心の中で慌てふためいたが、夜姫はそれに追い打ちを掛けた。

「では、劉備様に謝って下さるんですか？私の願いを叶えて下さるんですか？」

夜姫は悲しそうな顔で袁術に訊ねた。

「勿論ですっ」

袁術は背に腹はかえられないとばかりに答えつつ顔を歪めた。

「……劉玄德殿。軽はずみな発言お許してください」

袁術は齒ぎしりしながらも夜姫の願いを叶える事にした。

「いえ。私是一向に気にしておりませんから」

劉備は当たり障りのない言葉を言ったが、視線は袁術を真っ直ぐに睨んでいた。

袁術も彼を睨み激しい火花を散らした。

『必ず……この屈辱を貴様の首で払ってもらおうぞ』

『何があるうと夜姫様を貴様のような男には渡さない』

二人は火花を散らしていたが、それを止めろと言わんばかりに袁紹が咳払いをした。

「夜姫様は心優しいですね。それに引き換え、我が異母兄弟は何と情けない事か……。またしても我が異母兄弟が失礼な真似を致しまして申し訳ありません」

袁紹は袁術を睨みながらも夜姫に謝った。

「私は気にしておりません」

夜姫は興奮していたが、それを抑えて平静な口調で言った。

「そうですか。では、ここにお呼びした訳を言います」

袁紹はまたしても咳払いをした。

そして訳を話した。

「夜姫様はただ今、劉備殿の陣に居りますね？」

「はい。それが一体？」

「劉備殿の陣は失礼な言い方ですが義勇軍の陣。天の姫である夜姫様の事を考えると、もっと安全で快適な場所に移動させるのが良いのではないか？と思いました」

「というと袁紹様の陣へ来い、という事ですか？」

「いえいえ。私の陣に来いとは言っておりません。ただ、やはりもう少し安全な誰かの陣へ来るのが貴方様の為になるのではない？と思いました」

袁紹は出来る限り言葉を選び夜姫を刺激しないように努めた。

先ほど異母兄弟が馬鹿な発言をしたせいで夜姫は興奮している。

これでまた怒らせては堪らない。

そのため強くは言わなかった・・・曖昧とも取れる言い方をした。

「どうでしょうか？夜姫様」

袁紹は夜姫に訊いたが、こつも続けた。

「ですが、直ぐに決めろとは言いません。先ずは我々4人の陣に1夜ずつ泊り、それで気に入った場所に来て下されば良いかと思いません。それで決められないなら最初と同じ通りにしても構いません」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

夜姫は袁紹の申し出に困惑した。

別に劉備の陣が住み辛いとは思わない。

それ所か自分などの為に色々と工面している事を考えると・・・迷惑を掛けているのではないかと夜姫は思っていた。

「劉備様。私は、私は・・・貴方様の陣に居ても迷惑ではないでしょうか？」

劉備に質問した夜姫。

その声は否定して欲しいという色が含まれているのを劉備は感じ取った。

「貴方様は私の為に色々と苦慮しております。その事で迷惑を掛けていますか？いるのでしたら出て行きますので正直に申して下さい」

夜姫は劉備に顔を向けて言い続けたが・・・やはり否定して欲しいという色が含まれていた。

「何を言います。貴方様を迷惑など誰も思っておりません。寧ろ貴方様を迎えられて光栄に思っております。貴方様へ良ければ何時までも我が陣に居て結構ですよ」

それを聞いた夜姫は安堵の息を吐いた。

まるで否定されるのを怖がっているように劉備には見えだが、安堵するのを見て彼自身もまた安堵した。

これで夜姫の気持ちは分かった。

夜姫はどの陣にも行かない、という事。

劉備は夜姫の意思を伝えようと思いき口を開こうとしたが、ある人物がそれを遮った。

「天の姫。我が名は曹操と言います」

唐突に一人の男が名乗った。

「・・・曹操・・・曹孟徳様ですか」

夜姫は唐突に自己紹介されて困惑したが、直ぐに一人の人物を思い出した。

「左様。この前は自己紹介ができませんでしたので、この場を借り

て名乗らせて頂きました」

曹操と名乗った男の方角は声から察するに袁紹の左だった。

曹操・・・字は孟徳もつとくと言い“乱世の奸雄”と謳われ三国演技では劉備の宿敵でもあり魏の地盤を築き上げた人物だ。

曹操の祖父は宦官だったが、袁紹と袁術が起こした宦官皆殺しで失った。

その事もあつてか二人の仲は決して良いとは言えなかった、と夜姫は調べた資料を頭の中で思い出した。

「曹操殿に従う形ですが・・・孫堅と申します。夜姫様」

今度は孫堅という男が夜姫に名乗った。

「孫堅様・・・海賊退治で武勇を馳せた方ですね？」

孫堅は呉の礎を築いた男で字は文台ぶんたいと言う。

17歳の時に智謀を駆使し海賊を追い払った逸話があるほど智謀に優れているが勇敢な男でもあり優れた善政も敷いたのか民達からは慕われていた。

この董卓連合軍にも参加し曹操と共に勇敢に戦った筈、と夜姫はまた資料を頭の中で広げて思い出す。

「はい。17歳の時です」

「17歳の若さで海賊を退治するなんて凄いですね」

17歳と言えば夜姫の世界では高校2年生だ。

そんな歳で海賊たちを追い払ったのだから素直に凄いと夜姫は思い口にした。

「いえ。ただ少し頭を使って追い払っただけの事です」

しかし、孫堅は謙虚なのかそれを苦笑して受け止めた。

「それでも凄いですよ。誰にも出来ない事ではありません」

尚も夜姫は彼を褒め称えた。

「天の姫に褒められるとは光栄に思います」

孫堅は夜姫と笑顔で会話をした。

そこへ曹操が割って入って来た。

「それにしても夜姫様は・・・お美しいですね。銀糸と薄紫糸が混ざり合った髪などこの世の者とは思えない美しさだ。いや白絹のような肌にその瞳も美しい・・・誠に美しい・・・実に美しい」

曹操の言葉に夜姫は僅かに眉を顰めた。

『銀と薄紫が混ざった髪？私・・・茶色なんだけど・・・どうなっているの？』

夜姫の髪は茶色だ。

それを銀と薄紫などというとはどういう事だ？

しかし、それ以前に曹操には何故か言い知れない恐怖を感じた。

「・・・・・・・・・・」

夜姫は僅かに下がり劉備の後ろへと立った。

それを見た曹操は苦笑いをして夜姫に優しい声で語り掛けた。

その声はまるで罪に誘う悪魔のようだ。

「そのように怖がらなくても私は何もしませんよ」

今は、な・・・・・・・・・・

何処からともなく夜姫の脳内に声がした。

曹操の声だ。

『これが曹操の本心？』

彼の心が見えた錯覚を夜姫は覚えた。

「どうなされたのですか？顔が青白いですが？」

尚も曹操は語り掛けてきた。

その怯えた子兔のような顔もまたそそののう・・・・・・・・・・  
『やだ。この男ひと・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・  
ここに居たくない。この男の傍に居たくない・・・・・・・・・・!!』  
夜姫はどうしようもない恐怖に襲われた。

そして一刻も早くこの場から逃げたいと思った。

「・・・・・・・・私、何処にも行きたくありません。・・・・・・・・劉備様の陣へ置いて下さいっ」

我を忘れたかのように夜姫は劉備の裾を掴むと懇願した。

それに皆は一様に驚いた。

先ほどまでの態度とは違う。

どういう事だ？と皆が首を傾げる中で劉備だけは冷静だった。

「夜姫様・・・・・・・・」

劉備は夜姫の様子が可笑しい事に気付いた。

まるで何かに怯えているかのように・・・・・・・・

「夜姫様。どうなされたのですか？御気分でも悪いのですか？」

典医が夜姫を安心させるように言うが夜姫は怯え続け誰の声も聞かないかのように言い続けた。

「ここは嫌です。ここに居たくないです。早くここを出たいです。早く陣に帰りたいつ」

夜姫は典医の言葉を無視して早くここを出たいと言い続け震え始めた。

「・・・・・・・・」

典医は夜姫がここに居ると不味いと判断した。

今の状態は尋常ではない。

「御気分が優れないのでしたら、薬師を・・・・・・・・」

袁紹が夜姫の様子を見て薬師を呼ぼうとしたが既に夜姫は典医を引き摺るようにして天幕を出て行った後だった。

「・・・・我々もこれで失礼します」

関羽と張飛も夜姫の後を追う為に天幕を出て行った。

「どうなさったのだろうか？天の姫は」

皆が茫然としている中で曹操だけは涼しい顔で言った。

「・・・・・・・・」

劉備は曹操を見た。

夜姫は曹操の言葉を聞くなりあの様に急ぎ足で出て行った。

その曹操は涼しい顔でいるが。

「殿。私達も失礼しましょう」

諸葛亮が劉備に言うと言劉備は頷いた。

「では、私も失礼します」

4人に一礼して2人は天幕を出て行った。

残された4人は夜姫の態度に些か驚いていた。

初対面の時は初々しいと言えば良いのか？

とにかく大人しい印象を受けたが、先ほど袁術に謝るように言った時は憤怒の印象を受けた。

そして今度は、まるで何かに怯えたかのように足早に去っていく姿は・・・保護欲を誘うと同時に滅茶苦茶にしたいという破壊願望に誘われた。

「一体、天の姫は何に怯えていたのだ？」

袁紹は訳が分からないとばかりに溜め息を吐いた。

それは他の者達も同じだった。

ただ一人を除いて・・・・・・・・・・

『あのよつに怯える姿もまた愛おしいのう。・・・そなたが欲しく  
なつたぞ。夜姫』

### 第三幕：英雄達と対面（後書き）

何だか思い付く限り書いた気がしましたので、少々手直しをしました。  
た。

**幕間：道化と茨の道（前書き）**

お待たせしましたー。

やっと更新です。（汗）

もう少し、出すのは遅めにしようと考えていたんですが彼女と協議した結果、少しずつキャラを出そうという結論に至りました。

## 幕間：道化と茨の道

袁紹殿の天幕を出た私は諸葛亮を伴い急いで夜姫様の後を追い掛けた。  
ていた。

夜姫様は速足で私の天幕に急いでいた。

典医殿が先導しているのだが夜姫様の方が速い。

それを雲長と益翼は追いかけて呼んでいるが夜姫様は足を止めない。

「何故あんなに怯えたのでしょうか？」

諸葛亮が呟き私は考えた。

夜姫様は何か怯えていたのは確かだ。

・・・尋常じゃない位に。

それが何なのかは分からない。

分からないが余りに怯えている。

何だ？

分からない。

夜姫様は何に怯えていたのだ？

諸葛亮が更に足を速めた。

思考を止めて視線の先を見ると夜姫様が倒れていた。

それを典医殿達が介抱し様とする所だった。

「夜姫様!!」

私は走った。

諸葛亮もまた続いて走った。

急いで夜姫様の所へ行くと典医殿に身体を起こされながら泣いていた。

空虚な瞳からは留めなく真珠のように綺麗な涙が零れ落ちて行く。

まるで本当の真珠だ、と私は不覚にも見惚れてしまったがそれ所ではない。

「夜姫様。大丈夫ですか？」

私は話し掛けたが、夜姫様は答えない。

「怖い・・・怖い・・・誰か助けて・・・助けて・・・」

夜姫様は身体を起こされながら誰に言うまでもなく助けを求めた。

傍には典医殿達が居るのに、だ。

「・・・夜姫様。大丈夫ですか？」

私はもう一度、夜姫様に話し掛けたが駄目だった。

ひたすら怯え助けを求め続ける。

一体どうなされたのだ？

もう一度、考えてみる。

夜姫様が怯え始めたのは何時だ？

一つの答えに導かれた。

・・・曹操殿。

あの方が夜姫様の容姿を褒めてから怯え始めた。

・・・あの方が、原因か。

・・・曹孟徳。

乱世の奸雄と言われ、その通り数々の失礼な言い方だが悪知恵などを働かせて魏という大国を支配している。

あの方は天下を虎視眈々と狙っている。

だが、帝からの信頼は厚い・・・

祖父であった曹騰そうとう様が“中常侍”ちゅうじょうじ・“大長秋”だいちようしゅうを務めていた事も理

由として上げられるだろう。

中常侍とは皇帝の傍で様々な取り次ぎなどを行う役職で大長秋は皇后府を取り仕切る宦官の最高位だ。

この2つの役職を曹操殿の祖父は務めていた。

この方はもうこの世に居ないが、その孫に当たる曹操殿を帝は厚く信頼している。

だからこそ、漢王朝の衰えを間近で曹操殿は感じて天下を狙い始めたのだろう。

いや・・・曹操殿だけではない。

皆が天下を狙い・・・天の姫である夜姫様を利用しようとしている。

恐らくその中でも曹操殿の気が強く・・・当てられたのだろう。

「いあ・・・来ないで・・・誰か・・・誰か・・・」

夜姫様は尚も助けを求め続けている。

誰が何を言っても聞こえていない・・・

くそ・・・くそっ・・・くそ!!

たった一人・・・目の前で苦しんでいる娘を助けられないで・・・  
漢王朝復興など出来るかっ

私は何も出来ない自分に激しい怒りを覚え拳を握り締めた。

血が滴り落ちるのを感じたが・・・こんな痛み・・・夜姫様の怯えに比べれば屁でも無い。

何か手は無いのか？

私は誰でも良いから助けを求めたかった。

『おお、随分と苛立ってるな？劉備殿』

頭の中に誰かの声が聞こえてきた。

ある程度歳を取った男の声だ。

誰だ？

私は頭の中に話し掛けてきた男に訊ねた。

『男に名乗る名前は持ち合わせてない。それより今、俺はお前さんの頭の中に話し掛けている。周りには気を付けろ』

言われた私はそれに頷いた。

『それよりそこのお姫さんを助けたいか？』

出来るのか？！

私は藁をも掴む勢いで声に訊ねた。

『ああ。ただし・・・代償が必要だぜ？』

代償だと？

『俺はただ働きが嫌いだ。だから、あんたに代償を求める』

代償とは何だ？

私に払える物なら払ってやる。

『威勢の良い台詞だな。あんたが俺に対して払う代償は“茨の道”だ』

茨の道？

どういう事が分からず私は訊ねた。

『そのままの意味だ。お姫さんを助ける代わりにあんたには茨の道を歩んでもらうだけだ』

茨の道を歩む・・・

・・・具体的にどういう事になるんだ？

『そうだな。世界を・・・国中を敵に回す事になる』

国中を敵に回す・・・だと？

『ああ。割に合わないかもしれないが・・・どうする？』

.....

無言になる私になおも男は質問してきた。

今、苦しんでいる娘を捨て未来を楽しむか？

娘を助け苦しい未来を歩むか.....

『さあ、どうする？劉備玄德様』

男は何処か楽しんでいる口調だった。

私は一度、夜姫様を見た。

夜姫様の顔は青白くなり始めた。

更には熱も出てきたと典医殿は告げた。

苦しそうな息をする夜姫様を見て私は決断した。

愚問・・・一人の娘も助けられず漢王朝復興など有り得ない！！

夜姫様を助ける。

そして私は茨の道を歩もうではないか。

例え世界を敵に回しても構わん！！

『それじゃあ契約成立だな』

だから、早く夜姫様を助けてくれ。

『そう焦るな。先ず姫さんの額に手を置きな』

私は言われた通り夜姫様の額に手を置いた。

皆は私の行動に視線を釘付けにするが私は構わなかった。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

何やら呪文を唱え始めた声の主。

私にはまったく分からない呪文だ。

怪術者か？

だが、今は夜姫様の方が先決だ。

私は考えるのを止めて夜姫様の容態を見続けた。

夜姫様の顔色が良くなり始めた。

そして・・・眠った。

『これで大丈夫だ。後は寝かせておけ』

声の主は息を吐いて私に告げた。

礼を言おう。

『礼なんか要らん。契約に従い俺はやったただけだ』

声の主はどうしても良さそうに言ってきた。

『本当に良かったのか？』

国中を敵に回すかもしれないのに……………

構わん。

夜姫様を助けられるなら私がどうなるうと構わない。

『大した度胸だ。気に入ったぜ。劉備玄德』

また会おう、と声の主は言ってきた。

また？また会えるのか？

『ああ。会えるさ。今度はお姫さんと会話をするが、な』

それじゃ、と言って私の中から何かが抜ける気がした。

だが、今は……………

「雲長。直ぐに夜姫様を寝台に寝かせろ」

「御意に」

雲長は頷くと夜姫様を抱き上げて天幕へと走って行った。

「殿。一体あれは……………」

諸葛亮が私に話し掛けてきたが私はそれを遮った。

「後で話す。今は夜姫様の身が心配だ」

「……………」

諸葛亮は私の言葉に頷き、皆で夜姫様が連れて行かれた天幕へと向かった。

天幕に行く間、兵たちが私に訊いてきた。

『夜姫様は大丈夫ですか？』

皆……………心から心配していた。

私はそれに対して大丈夫だ、と答えた。

「ですが、お顔の色が……………」

「もう良くなった。どうやら、慣れない環境で疲れたらしい」

「そうですか……………俺達に出来る事って無いでしょうか？」

「そうだな……………」

私は考えてみた。

夜姫様を心配する彼等に何も無い、などと言うのは酷過ぎる。

かと言って何かあるのか？と言われると困る。

『それだったら、風呂にでも入れてやりな』

そなたは……………

『また会おう、なんて格好付けたが直ぐに来た。まったく世話が掛る姫さんだ』

その声には昔を懐かしむような色合いがあった。

失礼だが、夜姫様を知り合いか？

『男の質問には答えない主義だ』

随分と男に厳しいのだな。

私は微かに笑みを浮かべた。

『男に優しくしても嬉しくないからな。それより風呂は出来るか？』

風呂？

『ああ。お姫さんは女だぞ？しかも、毎日…………とは言わないが2、3日に1回は湯に浸かる』

風呂…………我々は湯に浸かる事は滅多にない。

水が足りないのだ。

それは宮廷でも同じではある。

濡れた手ぬぐいで身体を拭く程度だ。

だが、夜姫様はどうやら2、3日に1回は湯に浸かるらしいが・・・  
ここは戦場だ。

何処も水は欲しいし無駄遣いは控えている。

『水が足りないなら俺が用意してやる。お前さんは風呂を作れ』

分かった。

風呂を作るのは出来なくはない。

ただ、木材を集めるのに時間が掛る。

『どれ位だ？』

明日の朝まで、と思う。

『なら明日の朝まで姫さんを寝かしつけておくから用意しろ。水は風呂が出来次第用意する』

分かった。

しかし、そなたは何者だ？

水を用意するなど簡単ではないぞ？

『何度言えば分かる。男の質問には答えないんだよ。しつこい男は嫌われるぞ。まあ、度胸に免じて答えてやる』

何処までも尊大な言い方だったが不思議と腹は立たなかった。

『一言で言えば道化。人を笑わせて楽しませる奴だ』

楽しませる？

私は楽しくないぞ。

『俺は女専門だ。野郎の笑いなんて反吐が出る』

そうか。

では、夜姫様の事を頼む。

ただし、何かしてみろ？

そなたを見付けだして首を刎ねてやる。

『おお、怖いねー』

斬られては堪らない、と男……道化は言つと私の頭から消え去った。

「諸君。夜姫様はこの地に来てから一度も湯に浸かっていない。風呂を用意できぬか？水は私が用意する」

私は兵達に道化から言われた事を伝えた。

「風呂なら出来ますっ」

「では、それを頼む。夜姫様は我々と違い女性だからな」

分かりました、と威勢よく言うと兵たちは風呂の準備をした。

「さあ、急いで天幕に行くぞ」

私は再び天幕へと急いだ。

天幕に到着した私達は直ぐ中に入った。

寝台には夜姫様が寝かされていた。

もう顔色は悪くない。

「義兄者。一体、あれは何をしたのだ？」

雲長が振り返り私を見てきた。

他の者も同じだった。

「うむ。実は……」

私は皆に道化の事を話した。

最後まで聞き終えた皆の反応は同じだった。

「流石は義兄者だつ。夜姫様を助ける為に茨の道を歩むんだからな  
!!!」

益翼が声を大きくして私を褒めたが、直ぐに雲長に叱られた。

「しかし、義兄者。その道化という者は何者でしょうか？」

雲長が訊いてきたが私は分からない、とだけ答えた。

「だが、少なくとも夜姫様の敵ではない気がする」

敵なら私に話し掛けず黙って夜姫様が死ぬのを見ていれば良いだけだ。

それを敢えて助ける事を考えると敵ではない気がする。

「それに夜姫様とは知り合いの気もする」

あの声から察するに知り合いだと察する事は出来た。

「しかし、水を用意するなんて仙人じゃあるまいし……」

益翼は道化を仙人では？と言ったが確証は無い様子だった。

「殿。その者は殿の頭の中に話し掛けたのですよね？」

諸葛亮が扇を弄りながら私に訊ねてきた。

「うむ。突然、私の頭の中に話し掛けてきた。そして夜姫様を治した」

仙人・・・そうでなくても人間ではない。

「私にも分かりませんね。ですが、夜姫様の容態が治ったのなら良いです。しかし、国中を敵に回すとは・・・・・・・・・・・・・・・・」

「諸葛亮よ。私は漢王朝を復興する夢がある。それには茨の道も歩む事だろう。それが確実になったただけだ。そう気を落とすな」

「ですが、国中を敵に回すという事は漢王朝も敵に回すと思いますか？」

「そうだとしても、一時の誤解だ。誤解は解ける。案ずるな」

言葉では楽観的に言ったが、心では不安だった。

道化は国中を敵に回す、と言った。

それは漢王朝もまた敵に回るという事を意味している。

それでも私は夜姫様を助けたかった。

漢王朝と戦う気は毛頭ない。

私は漢王朝にこの身を捧げている。

殺されるのならそれで本望だが・・・夜姫様の安全を見るまでは死ねない、と思う自分が居る。

しかし、悪い気はしない。

漢王朝復興と同じ位・・・いや、それ以上に私は夜姫様を護りたかった。

それが今の私の正直な気持ちだ。

夜姫様の方へ視線を向けると・・・可愛らしい天女の寝顔が見えた。

純粹な寝顔・・・まるで赤子だ。

この笑顔を汚してはならない。

汚す者は誰であろうと力の限り退けてみせる。

私は夜姫様の寝顔を見て改めて決意を固めた。

## 第四幕：姫への送り物

何やら良い香りが鼻を攪り夜姫は目を覚ました。

眼を開けているのに視界は暗い。

最初こそ深い絶望に見舞われたが、今はもうそれを覚えない。

寝台に寝かされていると知った夜姫は上半身を起こした。

「私……………」

夜姫は袁紹の天幕で自分が何を……………どんな事をしたのか思い出した。

曹操の本心と思われる声を聞いて恐怖に駆られたのだ。

そして取り乱した。

……………あの気は曹操の気だ、と夜姫は思った。

まるで燃えるように熱い気だった……………自分を燃やし尽くすほど熱い気で思い出すと頭が痛くなった。

「頭、痛い……………」

夜姫は額に手を当て、曹操の事を考えるのを止めた。

すると頭痛は止み元に戻った。

「……曹孟徳……」

夜姫は、出来る限り曹操と会わないようにしようと思った。

「おお、目が覚めましたか。夜姫様」

天幕を開け典医が入って来るのを夜姫は気付いた。

「はい。あの、私……」

「それは後でお話しましょう。ですが、今はどうぞ外へ」

典医は夜姫の質問を保留にし、夜姫の手を取った。

「外に何かあるのですか？」

「ええ。夜姫様が喜ぶ物です」

『私が喜ぶ物？』

夜姫は典医の言葉に首を傾げるしかなかった。

典医に連れて行かれて外に出た夜姫を太陽の光が照らす。

その光で夜姫の紫が少し掛った銀髪が怪しい光を放ち遠い所まで照らす気がした。

「典医様。一体何処へ？」

天幕からかなり離れた場所に連れて行かれる気がしたので夜姫は不安になり始めた。

「もう直ぐ着きますからご安心を」

典医は夜姫を安心させるように言いながら歩き続けた。

どれくらい歩いたのかは不明だが、だんだん心落ち着く香りが強くなってきた。

『何の匂いかな？花の香りに似ているけど……………』

夜姫はまったく分からずにいた。

こんな時に眼がみえれば、と思うが……………

「夜姫様。ご気分は如何ですか？」

思考している夜姫に劉備の声がした。

「劉備様……………」

夜姫は劉備の声を聞くと心が落ち着くを感じた。

「ご気分は如何ですか？」

もう一度、彼は訊ねた。

「あの、私……………」

「昨夜の事なら大丈夫ですよ」

些か驚きましたが、と劉備は言い夜姫の言葉を遮った。

「すみません……どうしてかは分からないんですが、急に怖く  
なつて……」

「それは……曹操殿が話して来てから、ですか？」

「……はい」

夜姫は劉備が出した人物の名に頷いた。

「あの人の声が聞こえたんです。頭の中に……」

外では安心させようとしていたが、内では自分に何かしようとして  
いる、と夜姫は言った。

「大丈夫ですよ。この劉備がお傍に居りますから」

劉備は夜姫に優しい声で語り掛けて安心させようとした。

「それより湯の準備が出来ましたよ。夜姫様」

「湯の準備？」

夜姫は首を傾げた。

この時代、湯に浸かるのは極稀の筈だ。

何よりここは戦場だ。

そんな所で湯など用意できるのか？と疑問を抱かずにはいられない。

「あのどうやって湯を？」

「雨が昨夜、降り始めたんです」

自分に湯に浸かせようと思いついた矢先に雨が降り急いで作り上げて溜めた、と劉備は答えた。

これに嘘は無い。

昨夜、風呂を作っていた途中に雨が降った。

その雨は普通の雨と違い劉備達が作った風呂にだけ降っている。

これには茫然としていたが道化と名乗る者の声がした。

『雨を降らせてるだろ？』

劉備は直ぐに良く出来るな、と言ったが道化はそれを鼻で嗤いこつと言った。

『湯を沸かす時間が惜しいから温めておいたぞ。 姫さんが好む温度だ』

そこまでするとは、しかも夜姫が好む湯の熱さまで知っているのだから些か引いてしまつのは言つまでも無い。

話を戻すと、あつというまに温かい湯が風呂に溜まったので典医が夜姫を呼びに行ったという訳だ。

「私のような娘の為に……ありがとうございます」

夜姫はここまでしてくれる劉備に感謝の念を伝えた。

「いえ。これも皆、夜姫様の人徳が成した事です。それから生憎と女性は居ないので不便だとは思いますが、お一人でお願いします」

劉備は申し訳なさそうに言ったが夜姫は少なからずそれに安堵した。羞恥心もあったが……それ以上に見られたくない理由があったから……

「さあ、どうぞ。夜姫様」

そんな夜姫に気付かず劉備は彼女を風呂へと案内した。

「周りを布で隠しておりますからご安心ください」

布を上にあげる音で確認しながら夜姫は言葉に頷いた。

布を潜り、中に入ると適度な熱さの湯気を感じた。

「では、ゆっくりと身体を癒して下さい」

「ありがとうございます」

夜姫は劉備に礼を述べて、彼が出て行くのを音で確認してから服を

手探りで脱ぎ始めた。

と言っても夜姫がデザインした服は脱ぎ易いようにしてある。

演劇では常に同じ服を着て演技するとは限らない。

時には直ぐに着替えたりする事だつてある。

今回の演劇に関してもそうだ。

だから、直ぐに脱げるように帯一枚で直ぐに脱げるようにした上に直ぐに着替えられるようにもした。

『我ながら良い出来だと思つわ』

自分で言うのもなんだが、それなりに出来ているなと夜姫は感心した。

帯を解き、服を脱いだ夜姫は手探りで丁寧に畳んで左腕に巻いていた包帯を解いた。

それから首に掛けていたネックレスを取り手探りで風呂を探した。

直ぐに手に堅い木の部分が当たつて、風呂だと判つた。

足を上げて中に入ると温かい・・・夜姫が好きな温度だった。

「はー・・・・・・・・」

肩まで浸かり夜姫は軽く息を吐いた。

「夜姫様。湯加減はどうですか？」

劉備の声が布越しに聞こえてきた。

「……ちょうど良いです。おまけに香水みたいに綺麗な香りがして……気持ち良いです」

劉備の質問に答えながら夜姫はまた息を吐いた。

「気持ち良い……」

夜姫は湯の中で身体を洗いながら空虚な眼差しを閉じた。

風呂に入れるなど夢にも思っていなかった。

実際、風呂に7日間も入れなかった夜姫としては嬉しかった。

『……眠くなってきたな』

このまま寝てしまいたい、と夜姫が思った時だ。

「劉備！何だ？この布は?!」

聞き覚えのある声があった。

この声は……

『袁術様ね』

彼に対する夜姫の第一印象は一言で表すなら「傲慢」だった。

誰振り構わず侮蔑するくらいがある。

実際、名家の血筋を自慢していたし色々と腹黒い話にも事欠かない人物だったから何とも言えないが。

「袁術殿。あまり近づかないで下さい」

劉備が袁術を押し留めるように言った。

諸葛亮、関羽、張飛の3人は生憎と出払っており典医は用事が出来たので居ない。

『不味い時に来たな』

劉備は内心で舌打ちを漏らした。

彼等が居れば何とかだったが、今は一人だけ。

この男を一人で相手にするには些か荷が重い。

「黙れ！！昨夜は夜姫様にお願いをされたから謝ったが、私は貴様を・・・貴様等を認めんぞ！！」

「別に貴方様に認められたいとは思っておりません」

劉備は袁術の言葉を涼しい声で受け流してみせた。

「ふんつ。夜姫様を自分の懐に入れて強気か？まったく夜姫様も憐

れな方だ。そなたのような男の陣に来たのだからな」

「・・・・・・・・」

夜姫は改めて袁術に怒りを覚えた。

昨夜の事もそうだが、この男は言う事が人の神経を逆撫でにする。

「私を悪く言うのは勝手ですが、夜姫様を憐れむのは止めて下さい」

劉備は布を背中にして袁術に言った。

夜姫は憐みを何よりも嫌う。

それは7日間と言う短い付き合いで学んだ事だ。

直ぐ後ろに彼女が居る。

聞いている事は間違いない。

なら、ここは早々に帰ってもらい何も無かった事にするのが一番だ。

そう思つて何とか送り帰そうとするが、お坊ちゃん育ちの彼にはその真意など分かる訳も無い。

「眼も見えない上にそなたのような貧乏武将の下へ来たのだ。憐れと言わず何と言う？それはそうとこの布は何だ？何の意味があつてこれを四角に囲んでいる？」

「それは・・・・・・・・」

劉備が答えようとした時だ。

「……袁術様」

布越しに夜姫は声を掛けた。

「や、夜姫様ツ。そこに居られたのですか？」

袁術は夜姫の声を聞いて不味い、とばかりに慌てた声を出した。

「昨夜に続いて……また劉備様を侮辱しましたね」

「あ、いや、これには……」

「もう謝って下さい、とは言いません。貴方と言う人物がどんな方なのか改めて認識しました」

名家と言う事を鼻に掛け相手を見下す嫌な男。

「や、夜姫様……」

「私……そういう方は一番嫌いなんです」

これに袁術は言葉が言えなかった。

劉備はここまでハッキリと嫌い、と言われた袁術に少なからず男として同情を禁じずにはいられなかった。

『ま、不味い……』

袁術は心の中で何とかこの状況を打開しなくては、と焦りを覚えた。今日ここに来たのは、夜姫に会う為だ。

昨夜の件について改めて謝り印象を良くしようと浅い考えを持ち来たが、当の夜姫が居ない。

探し歩いていると布に囲まれた部分が見えた。

そこには自分に屈辱を与えた劉備玄德が居たので昨夜の意趣返しとばかりに言い掛かりを付けたのだが……………

運の尽きと言えた。

「夜姫様……………」

袁術は跪き、布越しに謝罪した。

心からの謝罪だ。

「この袁術。貴方様の御心を汚す積りは毛頭ございません。ですから、どうかお許し下さい」

「…………嫌、と言ったら？」

夜姫はここは強く出るべきと思い、敢えて冷たい口調で言ってみせた。

「夜姫様ッ」

「私は、劉備様を恩人と思っております。その恩人を侮辱する方を許せるほど寛大な心は持ち合せておりません」

「ど、どうか、この袁術に寛大な御心を！そのお姿を見せて下さい  
！！」

お願いします、と言いつち上がって近づこうとしたが石に躓いてしまった。

そして盛大に転んだ。

劉備がそれを抑えようとしたが、重い鎧を着ている方は袁術だから重さに負けて後ろに倒れて行く。

“ あーあ、やつちゃった ”

誰かの声があったが誰にも聞こえない。

布が夜姫の居る風呂に倒れた。

「きゃっ」

夜姫は頭に何か掛るのを覚えて軽く悲鳴を上げた。

「夜姫様！！」

袁術は押し倒す形となった劉備には眼も向けず布を退かそうとした。

そして……

「ん？これは……………」

布越しに掴んだ手に柔らかい感覚が来る。

もしや……………」

「き……………きゃああー!!」

夜姫の悲鳴がすると同時にパチンツと乾いた音が木霊した。

## 第五幕：姫君の言葉

「……申し訳ありません!!」

劉備が指揮する義勇軍の天幕の中では袁術が地面に頭を擦りつけて何度も謝っていた。

謝っている相手は言わずとも分かるが夜姫だ。

夜姫本人は典医に背中を撫でられながら俯いていた。

その傍らに劉備と諸葛亮が控え、夜姫を護るように関羽と張飛が仁王立ちで土下座する袁術を睨んでいる。

「や、夜姫様が、風呂に入っているとは知らず……」

袁術は土下座していた顔を上げた。

その顔には……赤い紅葉が咲いていた。

それを見て張飛は笑いそうになったが、それを必死に抑え我慢した。

先ほどの出来事は不可抗力と言えば不可抗力だ。

だが、物事そんなのは言い訳に過ぎないと断罪されるのが世の常と言える。

夜姫の悲鳴は陣内に広がり、皆が一斉に駆け付け泣く夜姫と赤い紅葉を咲かす袁術が居るのを見た。

それで直ぐに皆は袁術を吊るし上げようとしたのは言つまでも無い。

しかし、仮にも総大将である袁術を吊るし上げにするのは不味いという事で、この事は他言無用と劉備が緘口令を敷き陣内で事を治めた。

だからと言ってそれで袁術が何の罪も問われないということそうではない。

現在、袁術は夜姫に平謝りをしている。

袁術としては人生最大の失態と言えた。

あろう事か天の姫の胸を掴むなど布越しとは言え言語道断だ。

本来な極刑と言われても文句一つ言えない。

「夜姫様ツ。誠に申し訳ありません。で、ですが、誓ってこの袁術。決して貴方様の・・・その、あの・・・」

「もう・・・良いです」

夜姫は静かに袁術の謝罪を遮った。

「あれは・・・不可抗力だと割り切ります。袁術様も・・・反省しているようですし、私も・・・お返しをしましたから・・・」

これには皆が驚いた。

普通こんな真似を幾ら不可抗力とは言え、怒り浸透で極刑を与えても良い筈なのに。

「や、夜姫様……………」

袁術はまるで罪を許す聖母を前にした罪人のように夜姫を見上げた。

「…………今度からは気を付けて下さい。それから他の人たちと協調性を持って下さい」

さもないと何れその性格が仇となり誰も助けてくれない、と夜姫は断言した。

「私の知り合いも貴方のような性格で身を滅ぼしました」

それが嫌なら改めろ、と夜姫は続けた。

「それに私はその性格が嫌いです」

袁術は罪を許されたとばかり思っていたが、性格を改めると説教をされて頭を垂れた。

「…………努力します」

「そうして下さい。そうすれば、貴方自身の為になります」

そう言った夜姫の声には厳しく接し成長させようとする母親のような温かさがあると彼は知った。

彼の母親は自分をこの世に産み落とした存在で俗に母親と言える立場にある。

だが、愛情という物は何一つ与えられていない。

だから、どんな物が愛情なのか？と幼い頃は考えたものだ。

もし、夜姫のこの温かさが愛情と言ふのなら……………

『貴方様は……………女神です』

皆を産み、その広い心で優しく抱き締めてくれる地母神という名の女神だ。

母親の愛情を得ずに育ち、何一つ困らずに生きて来れたが愛情には飢えていた。

人一倍。

だからこそ、ああいう性格になったのか？と問いたくなるが。

袁術はたった一言の言葉で夜姫に心奪われた。

初めこそ天の姫であり外見も申し分ない夜姫に心奪われたが、それは利用価値があるからというだけの事。

ただ美しいから心奪われただけ。

一時の感情で、だ。

しかし、今は違う。

堪らなくこの娘が愛おしくなった。

この娘の為ならば、どんな事も成し遂げようとさえ袁術は想っていた。

たった一言の言葉で……………

「夜姫様……私は……………」

袁術は何かを言おうとした。

その時……………

「敵襲!!」

兵の一人の叫び声がした。

「!!」

この叫び声に誰もが気を張り巡らせた。

「夜姫様ッ。ここに居て下さい」

劉備は夜姫に天幕から出ないように言うと急いで天幕から出て行った。

袁術はどうするべきか迷った末に夜姫の傍に居る事にした。

ここは自分の陣ではないから部下は誰も居ない。

そしてここには誰も居なくなったのだ・・・夜姫だけを除いて。

「夜姫様・・・この袁術が傍に居ります」

袁術は夜姫に近付き、安心させるように語り掛けた。

「袁術様・・・」

夜姫は袁術の名を口にした。

先ほどまでの態度とは打って変わり怯え切っている。

「貴方様は私がお護りします」

「でも、私は、貴方を・・・」

「貴方様に対する償いとも取れますし、天の姫であるからとも取れる事でしょう」

夜姫が言いたい事は分かる。

自分を嫌っているし、そんな自分に酷い台詞を投げた。

そんな自分を護ってなどと言える訳が無い。

袁術自身も夜姫を利用しようと言う後ろめたさの気持ちがあったのは否定できない。

事実、夜姫には自分を助けて株を上げようとしているのでは？という疑惑の色が僅かに込められていた。

「……今はこの袁術に何も言わず、その手を差し出してもらえませんか？」

私を嫌っていても構わない。

利用しようとしていると思っても構わない。

しかし、この場だけはどうかその嫌っている男に手を委ねて下さい。

そうしなければ貴方を護る事は叶わない。

「お願いします」

袁術は彼女に頼んだ。

懇願に近い頼み方だった。

「……私を護って下さい」

夜姫は袁術の言葉に動かされる形で右手を差し出した。

「命を掛けて貴方様をお護りすると約束します」

夜姫の手を握り袁術は堅い声で告げた。

「……貴方様を護り死ねるのであれば、それもまた本望と言えます。最後になつてからですが……貴方は私に、温もりという物を・

・愛情という物を教えて下さった』

その貴方を護り死ねるのなら価値はある。

戦う価値はある。

この娘を護り討ち死にすれば死後は英雄として祀られるだろう・・・  
などという下種な考えは思い浮かばなかった。

天幕の外では槍などが交わる音と悲鳴と叫び・・・血の臭いがする。

『・・・本当に戦場、なんだ』

改めて自分の来た世界に戦慄を覚えた。

だが・・・何故か懐かしい気持ちも覚えた。

『・・・わたしは、この場を・・・知っている・・・感じている・・・  
・・・』

幼い頃から見ると。

そこは戦場だった。

そこに自分は居た。

それを懐かしんでいる。

『私は、一体・・・』

天幕が引き裂かれる音と共に大勢がなだれ込む音がした。

「夜姫様ッ」

袁術が夜姫を背に隠し剣を抜く音がする。

一斉に襲い掛かる気配を感じると同時に刃がぶつかる音がする。

眼が見えない夜姫は誰が敵で味方なのかも判らずただそこに居るしか出来ない。

だが・・・・・・・・・・

「ぐわっ」

聞き覚えのある声がした。

斬られる音と共に・・・・・・・・

・・・“頃合いだな”

誰かの声がすると同時に夜姫は目の前の光景が見えた。

ここに来てから初めて眼に入ったのは血を流し倒れる男の姿・・・・・・・・

「や、夜姫、様・・・・・・・・お逃げ、下さい・・・・・・・・」

男は鎧から血を流しながらも夜姫に逃げるように言った。

「袁術様……………」

声で袁術だと判り夜姫は彼に近付き、血で濡れた鎧に手を当てた。かなり深く斬られており息も荒い。

血で手が、服が汚れるのも構わず夜姫は袁術の血を止めようと必死になった。

「ほおう……上玉じゃねえか」

下種のように薄汚い笑い声が聞こえて振り返れば兵士が一人いた。手には血を吸った剣が握られている。

「……貴方が、袁術様を……………」

「ああ。そいつの首とあんたを持ち帰れば報酬は思いのままだ」

兵士はケタケタと笑いながら夜姫に近付いた。

身体が熱くなるのを夜姫は感じると同時に頭に幾つもの光景が浮かんで消えて行く。

『……様ッ』

男が自分の名を叫ぶと同時に槍で貫かれた。

背後を見せていた自分の不手際で……………

それでも彼は自分の名を呼び、逃げるように言った。

自分はそれに対して逃げずに彼を傷付けた敵を睨み据えた。

その光景が今の光景と重なる。

「よくも・・・さない・・・さない・・・さない・・・さない・・・」

夜姫は聞き取れない声を発しながら立ち上がった。

「ん？どうした？今度はお前さんが相手でもするのかい？」

兵士は夜姫に向かって左手を伸ばした。

“己が犯した罪を知らないまま死ね”

また誰かの声がした。

それと同時に兵士の首が宙を舞い、地面に転がり落ちた。

首を無くした身体からは血が大量に噴き出し夜姫を全身に掛ける・・・

まるで赤い雨だ。

袁術は自分を切った敵兵の首を見たが、その顔に驚いた。

自分が死んだ事に気付いていない顔だった・・・

つまり自分が斬られたという感覚を与えない速さで斬ったという事

だ。

「夜姫……様……」

袁術は彼女の名を呼んだが、彼女はそれに反応しない。

そんな夜姫の手には大きな両刃の剣が握られていた。

柄は錆ついた銀で鍔の部分は平行に伸ばされただけという極めてシンプルな剣だった。

だが、剣からは炎が出ている上に柄の下には鎖があった。

「……さない……さない……さない……許さない」

柄を力強く握り締める夜姫は顔を上げた。

……金色に瞳が輝いていた。

「……よおおおくううううもおおおおお“私の家族”を傷付けたなああああ!!」

地面を揺らすほどの大声に誰もが戦う事を止めた。

声の方向は夜姫の居る天幕からだった。

『夜姫様ッ』

劉備は敵兵を剣で斬り伏せると急いで向かおうとした。

しかし、その前に天幕が弾け飛んだ。

まるで紙切れのように散り散りとなり宙を舞ったが・・・燃えて無くなった。

消えた天幕には血を流す袁術と炎を宿す剣を握る夜姫が居た。

夜姫の身体は青白い炎に包まれており、瞳には怒りが宿されていた。

誰もが夜姫の姿に眼を奪われ見つめていた。

「貴様ら・・・よくも私の部下を・・・家族を傷付けたな・・・許さない。何人たりともこの場から生かして帰さん。全員・・・我が剣の錆にしてくれる。さあ、参れ！我が首を取れば報酬は思いのままぞ！！」

夜姫の声に敵兵はまるで砂糖菓子を見つけた蟻のように走り出した。

それを劉備達は止めようとしたが、皆、一瞬にして消し飛んだ。

たった一振りですべてが塵と化したのだ・・・夜姫が剣をたった一振りしただけで・・・敵だけ綺麗に消滅させたのだ。

「夜姫様・・・！！」

それに啞然とした劉備だが急いで夜姫の傍へ走り寄ったが、他の者もまた同じだった。

急いで夜姫に近付くと、彼女は袁術に跪いていた。

「……どうして、こんな馬鹿な真似をしたのよ……」

夜姫は劉備達には眼もくれず袁術に質問を浴びせた。

真つ直ぐに袁術を見つめる夜姫の……月の瞳は哀しんでいた。

「や、夜姫、様を、護れるのなら……死んで本望です……  
……ご無事で、何よりです」

袁術は血を大量に吐きながらも笑ってみせた。

皆はその笑みを見て、もう長くないと思った。

『美しい……』

袁術は夜姫を見て嘆息した。

己が血で汚れているのに、彼女は美しかった。

剣を一振りしただけで目の前の敵を一掃してみせた夜姫。

その姿は、戦いの女神と言える程までに凄烈にして苛烈……しかし、今は自分に手を差し出す慈悲深い女神に見えた。

「馬鹿。何が死んで本望よ……死んだら終わりでしょ？……生きて、私を護ってこそ本望と言いなさいよ。馬鹿……」

夜姫は袁術の言葉を否定した。

二度も馬鹿と言われた袁術だが……それでも嬉しかった。

こんな言葉にも温かさが含まれていたから……

「は、ははははは……今度、また生まれ変わったら、そのように言いましょう……」

もし、人間に生まれ変わり夜姫と出会えたら、の話だが。

「貴方が生まれ変わる必要は無いわ……私“だけ”で良いのよ」

貴方達を護れなかった私だけが輪廻転生を行い苦しみを味わうので十分。

その言葉に誰もが耳を傾けた。

尚も彼女は語り続けた。

貴方は……貴方達は生きて、私の帰りを待っていて……

「そうすれば、またこうして巡り逢えるのだから……違うわね。私が、貴方に……貴方達に逢いに来たのね」

今度は誰も……全員を救って幸せになりましょう。

夜姫はそう言うと言術の傷口に手を伸ばすと何かを流し込んだ。

身体から放たれるそれは……

「気だ……」

典医は夜姫の行っている所を見て呟いた。

「気ですと？」

諸葛亮が典医に訊ねた。

「はい。気を相手に流し込む事で傷を癒すんです」

しかし、それが出来るのは極僅かな者だけ。

その者達は仙人などと謳われる者達だ。

気を流し込まれた袁術はみるみる傷口を癒し生気が満ちてきた。

反対に夜姫は汗を流し倒れそうだった。

“まだ早過ぎたか”

誰かの声がしたが、誰も聞こえずに終わった。

袁術の傷が癒えると夜姫は倒れた。

剣もまた消え、夜姫の気も消えてしまった。

「夜姫様ッ。しっかりして下さい」

劉備は夜姫を抱き起こし名を呼んだが、夜姫はグッタリとして眼を開けない。

対称に袁術は身体を起こし、傷が癒えている事に驚いた。

「こ、これは……………」

自分は敵に深く斬られて死のうとしていた。

それを助けたのは目の前で眼を開けようとしないう夜姫だ。

「何をしている直ぐに夜姫様を寝かせて薬師を呼べ。私の代理と言つて呼べ。速くしろ!!」

袁術は近くに居た義勇軍に向かって命令をすると急いで寝かせられる準備を始めた。

その様子を見て劉備達も做った。

『夜姫様、どうか眼を開けて下さい……………』

袁術は夜姫に語り掛けながら、夜姫の言葉を思い出した。

今度は……………全員を救い、幸せになりましょう……………  
……………

## 第六幕：眠る姫君

夜姫が気を失ってから数刻ほど経過した。

燃え去った天幕は袁術が用意した天幕で解決したがまだ問題はあった。

現在、劉備並びに袁術は彼の異母兄弟であり同じ総大将である袁紹の天幕に居た。

目の前には袁紹、曹操、孫堅の3人が椅子に座り2人を見ていた。

なぜ2人が居るのか？と言えば袁紹から訳を話すように呼び出されていたのだ。

あれから敵が義勇軍の陣を攻撃したという事が知れ渡り急いで駆け付けたのだが、死体が少ないのだ。

報告では軽く見積もっても千人は居たというのに死体は僅か数百。

退却したという報告も聞いていないし、したとしても何人かはやられている筈……

それが無いという事に疑問を感じて劉備とその場に居た袁術に訳を言う様に呼び寄せたのだ。

だが、劉備も袁術も口を閉ざしたままだ。

袁術に到っては致命的な傷痕が残る鎧を着ているのに生きている。

それを訊ねたが無言で答えない。

「……劉備。なぜ話さんのだ？」

袁紹はもう何度目か忘れた言葉を口にした。

それに対して劉備は口を貝の様に閉ざしたままだった。

「私はそなたを買っている積もりだ。力も貸している積もりだ」

その私が質問しているのになぜ答えない……

「夜姫様に何か遭ったのか？」

曹操が袁術の質問に答えない劉備に鋭い視線を寄こして質問した。

「……お答え出来ないと言うより私にも分からないのです」

劉備は曹操の質問に初めて口を開いたが、答えにはなっていないかった。

「分からないとは？」

曹操はどういう事か、と訊ねたが劉備は首を横に振った。

「何が、どうなったのかです。何も……理解できなかったんです」

『……………』

3人は無言で劉備を見つめた。

真意を確かめる積もりだが本当に何も分からない顔だった。

「では何か気が付いたら教えてくれ」

袁紹はこのまま訊いても駄目だと判断したのだろう。

一度、帰るように言った。

「はい……」

劉備は一礼して天幕を出て行き袁術も同じだった。

残された3人も目撃者があれではどうしようもないと溜め息を吐かずにはいらなかった。

天幕を出て陣を後にした袁術は劉備より少し遅く歩きながら考えていた。

『夜姫様………』

……彼女は自分を助けてくれた。

否。

あれは自分ではない別の人物に放った言葉だ。

誰なのかは分からない。

部下、家族と言っていたから部下か？

それとも家族か？

もし、部下なら……

『良い主人を持ったな』

部下の為にあれほど激昂する主人はそう居ない。

戦ともなれば誰が死ぬか分からないし死んで当たり前だ。

それに一々……付き合っていたら身が持たない。

だが、夜姫は部下が傷つけられた事に怒り悲しんだ。

部下を愛している証拠だ。

そんな主人の下で戦える武将や兵はどれだけ幸せだろうか？

しかし……分からない事もある。

『私“だけ”で良いの。輪廻の苦しみを味わうのは……』

だけ……どういう意味だ？

『貴方達は待っていて。そうすれば巡り逢えるから』

しかし夜姫は否定した。

『違うわね・・・私が貴方“達”に逢いに来たのね』

そして、こう言った。

今度は皆で幸せになりましたよ・・・

今度は・・・

『何か遭ったのか？』

袁術は絞れるだけ絞った知恵で考えた。

「・・・・・・・・」

自分の知恵など高が知れているが答えを見つけた。

夜姫は過去に何か遭った・・・・・・・・

安直な答えでしかないが、それでも何か遭ったのだという事は見つける事が成功した。

「袁術様。貴方は、夜姫様をどう思いますか？」

唐突に劉備は袁術に問いを投げた。

「・・・この身に代えても護らなければならぬ方と知っている」

自分でも驚くほど袁術は劉備の問いに答えた。

以前なら質問など鼻で嗤い答えなかっただろう。

「あの方は私を助けてくれた。そして私に温もりを教えてくれた・  
・恩人だ」

その恩には何があるかと返さなければならぬ。

「そなたはどうだ？あの時の夜姫様を見て恐怖を感じたのか？」

「いいえ。断じてそのような事はありません」

これに劉備は直ぐに否定した。

「夜姫様は敵をたつた一人で、たつた一振りで、殲滅しましたがそれで恐怖など感じません。ただ・・・・・」

「ただ、何だ？」

「ただ・・・夜姫様は、何か深い過去を持っている、と思いました」

「私もだ。あの方は過去に何かある」

知りたいが、当の本人が眠り続けている以上は分からない。

それに無理やり訊く気にもなれない。

それでも言える事が一つだけある。

『何があるかと護らなければならぬ存在』

「私は・・・そなたが嫌いだ」

袁術は足を止めて言った。

劉備もまた足を止めて袁術を真正面から見た。

「義勇軍だからではない・・・そなたが夜姫様を安心させられる心を持っていくからだ」

私ではあの方を安心させられる心は持っていない。

「だから嫌いだ。だが、夜姫様を護りたいと願うそなたの気持ちは理解出来る」

手を組もう・・・

「私には夜姫様が過ごし易いようにできる“力”がある。そなたには夜姫様を安心させられる“心”がある」

お互いに必要な物だと袁術は言った。

「それではどうなさるお積りですか？」

劉備は続きを促した。

「今日から私の陣へ来い。全員連れてな」

「それでは他の総大将に妬まれますよ？」

「元より覚悟の上だ。それに私を蔑む者は多い。そなたもまた私を嫌っているだろ？」

「はい。貴方は名家という生い立ちから他人を蔑む悪癖がある上に性格も陰険で最悪です」

「言ってくれるな。だが、良い気持ちだ」

“お前はマゾか？”

また誰かの声がした。

しかし、誰にも聞こえない。

ただ彼の言葉だけが空に漂っているだけだ。

「そなたと夜姫様位だ。そのように真正面から言うのは」

「袁紹様も言うのではないですか」

「あの男とは違うのだ。それよりどうだ？」

「お言葉に甘えさせてもらいます」

劉備も今の状況では駄目だとは痛感していた。

夜姫を安心させられる事は出来る。

出来るが、自分達は義勇軍で金も無いし必要な兵力も無い。

袁術には自分達に足りない物がある。

自分と目の前に立つ袁術が手を組めば夜姫をもっと安心させられる上に快適に過ごせられる。

だから、貴方と手を組む。

「ですが、夜姫様に害なすとなれば容赦しませんよ」

「その言葉そっくり返す」

お互いに暫く見つめ合ったが、やがては歩きを再開した。

自分の陣へと戻った劉備は袁術に仕えている薬師と会った。

「夜姫様の具合はどうですか？」

劉備が薬師にそれを訊ねると薬師は問題ないと答えた。

「気を使って疲れているのでしょう。恐らく寝ていればその内目を覚まします。ですが、衣服などは血で汚れているので交換した方が宜しいかと」

「それなら直ぐに用意する」

袁術が薬師の言葉に返事をした。

「劉備。私は陣へと一時戻る。それまでは頼む」

「分かりました」

袁術は劉備が頷くのを確認してから薬師を伴い自分の陣へと戻って

行った。

袁術と薬師が消えてから劉備は皆を集めた。

「明日から我々は袁術殿の陣に入る」

事の顛末を言つと皆は渋々ながらも納得した。

夜姫の事を考えればここよりもつと環境の良い場所に移すのが良い。

しかも、向こうは自分達も来いと言つてきた。

これならまだ納得が行く。

自分達の力不足を痛感しているからこそ渋々納得したのだ。

張飛は袁術が気に入らないと言つていたが夜姫の事を考えると仕方なく従うしか無かった。

それから少し時間が経ち袁術が数人の部下を引き連れ戻つて来た。

「劉備。夜姫様はまだ覚めないか？」

「はい」

「そうか。先程、部下達に説明したが了承した」

当たり前のように思えたが簡単ではなかったようだ。

なぜ自分達が義勇軍と陣を共にしなければならぬのだ？と憤りの

声が上がったようだ。

それを袁術は説得し、何とか了承させた。

「申し訳ない」

「そなたの為ではない。夜姫様の為だ」

袁術は劉備の言葉に素っ気なく答えた。

「それから夜姫様の衣服は用意した。渡してくれ」

彼が渡してきたのは黄緑色の着物だった。

高そうな代物に違いないのだが、夜姫が着ているのに比べると見劣れする。

「流石にあれほどの物は用意できなかった」

誰もが袁術のように名家の者でも用意できない物があるのかと驚いた。

場所が場所だけなのも理由だがあれ自体が凄いのだ。

「助かります」

劉備が礼を述べると同時に典医が来た。

「夜姫様が目を覚ましました」

簡潔に典医は言った。

しかし、それだけで十分だった。

典医の言葉は簡潔だったが、眼が何か遭ったと告げていた。

急いで夜姫の所へと行くと夜姫は急ごしらえで用意された寝台から上半身を起こし虚ろな眼差しで何かを見ていた。

「夜姫様。お目覚めですか」

劉備が夜姫に語り掛けたが、何か様子が変と感じた。

額に髪の毛が張り付いているのだ。

しかも、息も些か荒い気がした……………

「劉備様……………」

夜姫は声がる方向に虚ろな眼を向けた。

「何か、悪い夢でも見ましたか？」

「……………はい」

頷くだけで夜姫は軽く息を吐いた。

「私が来た時には悲鳴を上げていました」

典医が小声で劉備に告げた。

「夢を見たんです。何処か分からない部屋に私は、鎖で繋がれてそこに一人の男が来るんです」

背はそれほど高くはないが、傲岸とも言える態度に高そうな服を着て自分を……汚す夢。

「大丈夫です。この劉備がお傍に居ります」

劉備は優しく夜姫の髪を撫でて安心させた。

「すみません……こんな話をして」

「いいえ。悪い気は話す事で抜けると言います。それで良いのです。そう言っつて劉備は夜姫をある程度、落ち着かせてから要件を切り出しました。」

「夜姫様。お目覚め早々に悪いと思つのですが、新しい衣服をご用意しました」

「新しい衣服？」

「はい。流石に同じ服を何日も着ているのは不便でしょうから袁術様をご用意して下さいました」

「袁術様は、無事……なのですか？」

「ええ。無事ですとも」

劉備は夜姫の言葉から……袁術が斬られた後の記憶が無いのだと察した。

敢えて言わないでおいた。

言ってしまうえば、夜姫は混乱するだろう。

それは避けたかった。

「袁術様は何処ですか？」

「ここに居ります」

袁術は寝台に近付き、肩膝を着いた。

「袁術様。傷は、大丈夫ですか？」

「はい。幸い劉備殿が駆け付けてくれたので助かりました」

夜姫様もご無事で何よりです。

袁術は夜姫が無事である事を改めて喜んだ。

「貴方が命がけて私を護って下さったからです」

お礼を言うのはこちらだ、と夜姫は言い返した。

「有り難き御言葉………尽きましては今後の事についてお話があるのです。御身体は大丈夫ですか？」

「はい」

袁術は劉備に視線を移し「話しても良いか？」と訊ねた。

それに劉備は頷き確認してから袁術は話し始めた。

「・・・・・・・・・・」

夜姫は最後まで無言で聞き続けた。

「夜姫様の事を考えるともつと安全な場所に移動させるべきと判断しました。もちろん劉備殿達も一緒です」

最後の言葉には・・・何処か嫉妬が込められていた。

自分ではない男が夜姫を安心させられる。

それが狂おしくて我慢できなかった。

声を上げて言いたかった。私が貴方を安心させたい・・・護ってみせる。

だが、その気持ちを袁術は抑えた。

自分はその時、敵に斬られ死ぬ所だった。

助けたのは夜姫だ。

そんな相手に護るなどおこがましいにも程がある。

もつと強くなり・・・改めて言おう。

袁術はそう言って自分を抑えた。

「夜姫様。私共も参りますから行きましよう」

劉備は沈黙している夜姫に説得するように話し掛けた。

「・・・劉備様はご迷惑ではないのですか？袁術様はご迷惑ではないのですか？」

夜姫は2人に訊ねた。

「ご迷惑など・・・貴方様を迎えられて光栄です」

「でも、私は何も出来ませんし・・・眼も見えないんですよ？」

夜姫は自分は迷惑以外の何でも無い、という口調で語った。

「夜姫様。失礼ですが貴方様はご自分を卑下し過ぎます」

袁術は夜姫に跪いたまま叱り付けるような口調で話し始めた。

「貴方様は何も出来ないと言いましたが、それは違います。貴方が居るお陰で劉備殿達は今も奮戦しておられる。そして私もまた貴方様に出会い諭された事で眼が覚めたんです」

貴方様には人を良い方向へと導く力がある。

それはとても大事な事だ。

「私は貴方様を迷惑などと思った類いはありません」

利用価値がある、とは思ったと正直に袁術は語った。

「それは私が天の姫、だからですよね？」

「はい。ですが今はそのような気持ちはありません。この身は全て貴方様の為に捧げます」

「どうして、私に……」

「貴方様を……」

そこまで言ったが、袁術は止めた。

いま言うのは駄目だ。

もつと自分を磨いてから改めて言おう。

そんな気持ちは出たから言わなかった。

「いえ。何でもありません。それで夜姫様。御答えは？」

「……」迷惑……いえ。どうか、私を連れて行って下さい

お願いします、と夜姫は頭を下げた。

「畏まりました。尽きましては、私の方から送った衣服を着て下さい」

血が付いたそれでは兵たちの眼があるから、と心の中で言いながら頼んだ。

「分かりました。時間が掛りますが、よろしいですか？」

「勿論です。女性が着飾るのは時間が掛りますからね」

「袁術様は・・・女性の扱いに長けていますね」

夜姫は僅かに笑みを浮かべて言った。

「え？あ、いや、その・・・」

「冗談ですよ」

「夜姫様・・・」

袁術はあんまりだと顔をした。

その笑みを見て皆が破顔して笑い出した。

「では夜姫様。こちらへ」

典医は夜姫の手を取り人目を離れた。

劉備達はその場で夜姫が帰って来るまでこれからの事を話し合う事にした。

「では、夜姫様は一番奥の天幕へ移動するという事で」

劉備は確認するように袁術に訊ねた。

「ああ。あそこなら一番、安全な地帯だ。そなた達義勇軍はその天幕の近く。無論私も一緒だ」

「孫堅殿は？」

孫堅は総大将の一人だが袁術の部下だ。

そのため陣は袁術の近くもとい中にある。

「孫堅にも伝えておいたが、快く受け入れてくれた」

「そうですか」

「うむ。それからこれは部下からの要望なのだが・・・夜姫様と宴を共にしたいと言っている」

仮にも陣へ招き入れるのだから、今の内に諸々の将達と交流を深めようというのが建て前らしい。

「それは夜姫様に訊かないと何とも言えませんね」

劉備の言葉に袁術は頷いたがこつも言った。

「だが、夜姫様の性格を考えると話せば出ると言っつのではないか？」

自分が迷惑を被っていると言っている夜姫だ。

それで皆が満足できるなら、と考えるのは当たり前かもしれない。

「ですが、夜姫様はまだ起きたばかりですよ」

「それでもあの方の事だ。体調など大丈夫と言って聞かんだろう」

「そうですね……」

2人はどうするべきか、と思い悩んだ。

それから暫くして夜姫が典医に連れられて帰ってきた。

袁術の渡した衣服を身に纏った夜姫は2人の前に立ち謝罪した。

「時間を掛けてすいません……」

「いえ。それでは参りましょう」

袁術に言われた夜姫は小さく頷いた。

そして皆でその場を去った。

幕間：総大将の気持ち（前書き）

幕間を入れ忘れたので足しておきます！！

## 幕間：総大将の気持ち

私は自陣に帰ると直ぐに腹心達を集めた。

腹心達は私の傷を見て尋ねてきたが大丈夫と答え要件を伝えた。

「夜姫様と義勇軍を我が陣に入れる」

腹心達はこれに驚いたが直ぐにこう言ってきた。

『なぜ夜姫様だけではないのですか？』

当然と言えば当然だ。

義勇軍など入れた所で意味など無い。

寧ろ彼等から言わせれば要らない荷物を押し付けられたような物だ。

しかし、私は続けた。

「私では夜姫様を安心させられない」

私ではなく・・・私達では夜姫様を安心させる事が出来ない。

部下達は夜姫様が安心できない、と聞き何も言えなかった。

「夜姫様は、ここに誰も知っている者・・・親しい人物が誰も居ない」

そしてやっと知り合えたのが劉備達だ。

そんな夜姫様を一人ここに連れて来たらまた混乱し動揺するだろう。  
.....

「私は夜姫様の為には劉備達も連れて来るのが良いと考えている」

悔しい事だが、我々では“今”は夜姫様を安心させる事が出来ない。

「もし、私の考えに賛同できない者は.....ここから出て行って構わない」

以前なら絶対に口にしない言葉だ。

部下達は驚いたが、嘘ではないと判ったのか暫く考えるように無言で顔を俯かせた。

どれくらい時間が経過したのか分からない。

「.....私は殿の考えに従います」

私の部下であり主筋を務める閻象えんしょうだった。

私が決める事に何かしら色々と言もとい反対の言葉を述べる。

だが、今回に関しては賛成してくれた事に対して少らず驚いた。

「何故、と訊いても良いか？」

「恐れながら天の姫であらせられる夜姫様は殿が先ほど仰った通り

誰にも親しい者が居りません」

「……………」

「その上……盲目では怯えてしまつのも無理はないでしょう」

親しい者もおらず眼も見えないとなれば誰だつて怯える。

「本当ならば怯えている筈ですが、運よく劉備殿の陣に降り立ちました」

献身的な程に介抱されたなら劉備に懐くのも無理は無いと閻象は語った。

「そうでなくても劉備殿に懐いても仕方ありません」

劉備殿は貴方と違い心優しいと言われた。

「一言余計だ」

「本当の事です。話を戻しますと殿の言いたい事は解ります」

そんな夜姫様を劉備から引き離して一人連れて来るなど出来ない。

「くどいようですが私はその意見に賛成です」

下手に引き離せば今以上に不味い、と閻象は語った。

「他の皆様はどうですか？」

「私も賛成です」

閻象の言葉に賛成を表したのは孫堅だった。

私の部下であり総大将の一人でもある孫堅は実に猛将と呼べる実力を誇っている。

その力は部下や仲間として迎え入れれば心強いが反面で敵に回したら恐ろしい相手でもある。

孫堅が閻象の言葉に賛成すると他の者達も納得できる言葉を言われて仕方無いと思ったのか私の意見に従うと言ってくれた。

ただし・・・抜け目が無く宴をしようと言ってきた。

妥協案とも取れるがこの場合は抜け目が無いと言って良いだろう。

宴が開かれたら夜姫様も出席する。

その時、自分達の名を売り覚えてもらおうという算段だろう・・・

ここで断るのも手だが、どうせ直ぐに言って来るのは明白だ。

なら、ここは早めにやっておいた方が良いと判断し了承した。

「では、夜姫様が休まれる天幕と義勇軍の天幕を用意しろ」

『はっ』

部下達は直ぐに取り掛ったが、閻象は一人残り私を見てきた。

「何か言いたいのか？」

「はい。殿・・・貴方様は何か悪い物でも食べましたか？それとも敵に斬られて生まれ変わったのですか？」

「・・・貴様は私に斬られたいのか？」

毎度毎度の事だがこの男は一言余計な上にこと私に関しては容赦なくズケズケと物を言う。

「いいえ。ただ、以前の殿でしたらそのような沈痛そうな顔をしませんし劉備殿を毛嫌いしていたので」

「今でも嫌いだ。しかし・・・夜姫様の事を考えれば握り締めた拳を開き手を結ぶ」

「劉備殿の陣で一体なにが起こったのですか？」

「・・・他言はしない、と約束できるか？」

「貴方様にお仕えしてから一度でも貴方様と交わした約束を私は破った事がありますか？」

質問に質問で返された私だが、直ぐに首を横に振り否定した。

この男が私の配下になってからだが、今までただの一度も他言をした事が無い。

つまり私を裏切るような真似はした事が無いのだ。

ただの一度も……………

「…………夜姫様に助けられた」

私はこいつだけには真実を教えようと思いい口にした。

最後まで聞き終えた閻象は些か信じられない顔をしたが改めて私を見て頷いた。

「左様ですか。それならば納得もいきます」

天の姫…………夜姫様の胸を鷲掴みにした上に顔を引つ叩かれたのですから改心する、とこの男は余計な部分を強調してきた。

「貴様は本当に一言余計だな」

「性分です。それで殿としては夜姫様を見てどう思いましたか？」

「…………美しかった。そして…………とても哀しくて優しい方  
と思う」

あの時の夜姫様の姿は美しかった。

それと同時に私を見つめる月の瞳は何処か切なかった。

しかし、私を罵倒する声には温もりが含まれており心が温まった……………

「だが、分からない事もある」

今度は皆で幸せになりましょう。

貴方達は待っていて・・・そうすれば巡り逢えるから。

「夜姫様は過去に何か遭ったのでしょうかね」

輪廻転生は死んでから様々な物に生まれ変わる事を意味する。

前世の記憶は無いのが普通なのだが、あの様子を見る限り夜姫様は記憶があると思える。

「かもしれん。だが、夜姫様の様子を見る限り何も覚えていない」

「となると一瞬だけその記憶が蘇るのかもしれない」

閻象の言葉に私は付け足すように言った。

「若しくは何かしらの出来事が発作で蘇るのかもしれない」

確かに、と閻象は頷いた。

「それで殿はどちらだと思えますか？」

「どちらでも良い。私はただ夜姫様の害を排除するだけだ」

これにまた閻象は眼を丸くさせた。

「本当に変わりましたね。以前などぜひと美しいから妻にしたい

とばかり口にしてたのに」

「ふんっ。あんな自分・・・胸糞悪くなるだけだ」

「過去もまた自分でしょうに・・・」

「煩い。それで分かっていると思うが他言は無用だぞ？」

「分かっております。私もむざむざ殿に斬られたくはないので」

「だったら、少しはその口を慎め」

何時か斬るぞ、と私は言っただけだ。

「性分なので出来ません。では、私は宴の準備をします」

そう言って閻象は出て行ってしまった・・・逃げたと言っても良いな。

しかし、それを追わずに私は部下を呼び夜姫様が着る着物は用意するように伝えた。

「畏まりました」

部下は一礼して天幕を出て行き、私は来るのを待つ事にした。

暫くして部下は戻ってきた。

手には黄緑色の絹で織られた着物がある。

「これくらいの物しか用意できませんでした」

流石に天の姫が着る物は用意できないと部下は言ってきたが私は首を横に振った。

「良い。夜姫様も文句は言わない。わざわざすまない」

それを言われて部下は驚いた顔をしたが、直ぐに一礼して出て行き私は着物を手に馬に乗ると数人の部下を引き連れて劉備の居る陣へと向かった。

私が行くと劉備が出迎え訊ねると夜姫様は未だに目を覚まさないと言われた。

まだ覚めないのか……………

まさか永遠に目覚めないのか？と一瞬だが思ってしまった。

そんな自分を恥じて私は着物を渡した。

それから暫くして典医が来た。

「夜姫様が目覚めました」

だが、皺だらけの顔は何か遭ったと告げている。

直ぐに私は典医が案内した場所へ劉備達と向かった。

夜姫様は急いで用意された寝台の上にいたが、上半身を起こして汗を掻いていた……………

しかも、息が荒い。

何か遭ったと直ぐに察して訊ねようとしたが劉備が先に夜姫様に声を掛けた。

「夜姫様、どうなさいました？」

劉備が訊ねると夜姫様は声の方向を見てから答え始めた。

「夢を見たんです・・・何処か分からない部屋に私は居ました」

鎖で繋がれた自分に近づく男。

背はそんなに高くないが他人を威圧するだけの貫禄があり・・・

「私を・・・汚すんです」

そこへ典医が入り「私が来た時は悲鳴を上げていました」と付け加えた。

私は拳を握り締めた。

夢とはいえ・・・夜姫様を汚すなど言語道断。

人の事を言える身分ではないが、それでも私は鎖で拘束した女を汚すほど落ちぶれていない。

第一夜姫様にはそんな真似をしたりしない。

絶対に・・・・・・・・

劉備は夜姫様を軽く抱き締めて安心させるように言葉を紡いだ。

「ご安心を。この劉備が御傍に居ります」

私は劉備が羨ましいと同時に悔しかった。

私も夜姫様を抱き締め安心させたい・・・・・・・・だが今の私では無理だ。

それでも、何時か必ず夜姫様を安心させられる男になると誓う。

それから劉備は私が渡した衣服を夜姫様に手渡した。

『袁術様は・・・無事ですか？』

私は名を呼ばれ安否を気にする夜姫様の元へ行き膝を着いた。

「ここに居ります」

夜姫様は私の手を握って来た。

温かく少しでも力を入れてしまえば容易に折れてしまいそうな手・・・

そんな手が私の手を掴んだ。

「袁術様・・・ご無事で何よりです」

貴方様は本当に優しい方だ。

自分も殺され掛けたのに他人の私を心配して下さるのだから。

「はい。貴方様もご無事で何よりです」

私は夜姫様に微笑んだ。

見えない瞳でも良いから私の笑顔を貴方に見せたい。

「……………尽きましては今後の事についてお話があるのです。御身体は大丈夫ですか？」

「はい」

私は劉備に視線を移し「話しても良いか？」と訊ねた。

それに劉備は頷いたので私は話し始めた。

「……………」

夜姫様は最後まで無言で聞き続けた。

「夜姫様の事を考えるともっと安全な場所に移動させるべきと判断しました。もちろん劉備殿達も一緒です」

私は最後の言葉に……………嫉妬が込められている事に気付いた。

自分ではない男が夜姫様を安心させられる。

それが狂おしくて我慢できなかった。

声を上げて言いたかった。

私が貴方を安心させたい・・・護ってみせる。

だが、その気持ちを私は抑えた。

あの時・・・助けてくれたのは夜姫様だ。

そんな相手に護るなどおこがましいにも程がある。

もつと強くなり・・・改めて言おう。

「夜姫様。私共も参りますから行きましょう」

劉備が沈黙している夜姫様を説得するように話し掛けた。

「・・・劉備様はご迷惑ではないのですか？袁術様はご迷惑ではないのですか？」

夜姫様は私と劉備に訊ねてきた。

「ご迷惑など・・・貴方様を迎えられて光栄です」

私は何を言うのか、と思いながらも本心を告げた。

「でも、私は何も出来ない上に眼も見えないんですよ？」

自分は迷惑以外の何でも無い、という口調で夜姫様は語った。

「夜姫様。失礼ですが、貴方様はご自分を卑下し過ぎます」

これに私は少し怒りを覚え夜姫様に跪いたまま叱り付けるような口調で喋り出した。

「貴方様は何も出来ないと言いましたが、それは違います。貴方が居るお陰で劉備殿達は今も奮戦しておられる。そして私もまた貴方様に出会い諭された事で眼が覚めたんです」

貴方様には人を良い方向へと導く力がある。

それはとても大事な事だ。

そう・・・とても大事な事なのだ。

「私は貴方様を迷惑などと思った類いはありません」

利用価値がある、とは思ったと正直に私は語った。

「それは私が天の姫、だからですよね？」

「はい。ですが、今はそのような気持ちはありません。この身は全て貴方様の為に捧げます」

「どうして、私に・・・」

「貴方様を・・・」

そこまで言ったが止めた。

いま言うのは駄目だ。

もっと自分を磨いてから改めて言おう。

「いえ。何でもありません。それで夜姫様。御答えは？」

私は無理やり答えを訊ねた。

「……」迷惑……。いえ。どうか、私を連れて行って下さい

お願いします、と夜姫様は頭を下げてきた。

「畏まりました。尽きましては、私の方から送った衣服を着て下さい」

血が付いたそれでは兵たちの眼があるから、と心の中で言いながら頼んだ。

「分かりました。時間が掛りますが、よろしいですか？」

「勿論です。女性が着飾るのは時間が掛りますからね」

「袁術様は……。女性の扱いに長けていますね」

夜姫様は僅かに笑みを浮かべて言った。

「え？あ、いや、その……」

「冗談ですよ」

「夜姫様……………」

思わぬ悪戯に私は夜姫様を少しばかり恨めしく思った。

だが、その笑みを見て皆が破顔して笑い出し私もまた笑った。

嗚呼、やはり夜姫様には笑顔が似合うと思わずにはいらなかったのだ……………」

「では夜姫様。こちらへ」

典医は夜姫様の手を取り人目を離れた。

残された私達はその場で夜姫様が帰って来るまでこれからの事を話し合う事にした。

「では、夜姫様は一番奥の天幕へ移動するという事で」

劉備は私に確認するように訊ねてきた。

「ああ。あそこなら一番、安全な地帯だ。そなた達義勇軍はその天幕の近く。無論私も一緒だ」

一番奥の天幕なら余程の事で無い限りは敵も来れない。

しかし、念には念を入れておく必要があるから後で何かしらの手を打っておかなくてはならない。

「孫堅殿はこの事を御存じですか？」

今度は孫堅の事を劉備は訊ねてきた。

彼も総大将の一人だが私の部下だ。

だが、あの男は私の下で何時までも居る男ではない。

何時か・・・近い日には独立か何かしらの行動を起こす事だろう。

「孫堅にも伝えておいたが、快く受け入れてくれた」

閻象とあの者位だ。

夜姫様と義勇軍を迎え入れても良いと言ったのは。

「そうですか」

「うむ。それからこれは部下からの要望なのだが・・・夜姫様と宴を共にしたいと言っている」

「それは夜姫様に訊かないと何とも言えませぬね」

劉備の言葉に私は頷いたが夜姫様の事だから・・・・・・・・・・

「夜姫様の性格を考えると話せば出ると言う筈だ」

「ですが、夜姫様はまだ起きたばかりですよ」

「それでもあの方の事だ。体調など大丈夫と言って聞かんだろう」

頑固な所もある夜姫様の事だ。

負い目を感じているから、こういふ所で補おうと思っている筈だ。

「そうですね……」

劉備は私の言葉に一理あるのか頷いた。

だが、私の中ではもう夜姫様は宴の話ですれば出ると確信していた。

それから暫くして夜姫様が典医に連れられて帰ってきた。

私が渡した衣服を身に纏った夜姫様は謝罪してきた。

「時間を掛けてすみません……」

「いえ。それでは参りましょう」

私は夜姫様の手を取り馬に乗せた。

「少し揺れますが、我慢して下さい」

「は、はい……」

夜姫様は馬に乗るが初めてなのか少し怯えていた。

だが、私の愛馬は怖がった夜姫様の気を感じたのか優しく鳴いた。

「わ、私、初めてだからゆっくりお願いしますね」

夜姫様は人間に話しかけるように馬に話し掛けた。

対して馬は承知したとばかりに頷きゆっくりと走り出した。

それを部下達が追い掛け、義勇軍達が続く。

「夜姫様、大丈夫ですか？」

私が訊ねると「大丈夫です」と答えが返ってきた。

「それより夜姫様。宴の事・・・本当に良かったのですか？」

まだ目が覚めたばかりなのだから、無理はしない方がと私は言った。

「いいえ。大丈夫です」

「ですが・・・」

「徹夜した事もありますから大丈夫ですよ」

「・・・そう、ですか」

この方に言っても無駄と私は確信した。

「夜姫様は頑固、ですね」

「ええ。一度決めたら梃子でも動かないと子供の頃から言われましてから」

子供の頃からは・・・・・・・・

それから私と夜姫様は陣へ行くまで他愛ない話をして過ごした。

## 第七幕：夜の舞姫

夜になるうとしてしている時間に夜姫は袁術の馬に横向きに乗って陣まで進んでいた。

袁術の横には劉備、関羽、張飛、諸葛亮、典医が居る。

反対側に袁術の部下が居り更にその後ろを義勇軍が付いて来ている構図だ。

「夜姫様は天の国では“大学”と呼ばれる所へ行っておられたのですか？」

袁術の質問に夜姫は頷いた。

陣へ向かう間、袁術は夜姫の国……居た世界に興味を前々から抱いていたので質問する事にした。

もつとも無言で陣まで行くには些か辛すぎるといっのが理由に含まれているが……

「はい。4年制で単位を取り論文などを書いて卒業に向けて勉強するんです」

「そこは身分などは関係あるのですか？」

諸葛亮が興味津々の様子で訊いてきた。

「いいえ。ただ、学位の差はありましたね」

更に言えば公立か私立か国公立によって金の掛りも違つと夜姫は付け加えた。

「なるほど。夜姫様の場合はどちらで？」

「私の場合は公立です。主に歴史を選考していました」

「歴史ですか。所で、先ほどサークルという物があると言っておられましたが、どんな物なのですか？」

「そうですね・・・具体的に言うならやりたい物を決めて、それ人を勧誘して活動する事ですね」

「夜姫様の場合は何を？」

「演劇です。ですが、部員も少ないですし資金も無いので別なサークルと掛け持ちをしています」

「そうですね。夜姫様の国は私達には無い物が沢山あるのですね」

「そうですね。でも、やはり人が殺されたりする事件はありますし、国によっては長い間戦争を続けている所もあるので・・・」

天の国ともなれば皆が平和で暮らしていると勝手に思っていたがそうではないようだ。

「所で夜姫様。夜姫様は先ほど演劇をしていると仰いましたが、何が御好きですか？」

袁術が暗い顔をした夜姫を気にして話題を切り替えた。

「そうですね……色々あり過ぎて迷ってしまいますが敢えて上げるとすれば……………」

「夜姫様っ」

夜姫は前方から馬の蹄の音がして一時答えるのを止めた。

「……袁紹殿」

劉備が前方から来る見慣れた男――袁紹を見て顔を歪めた。

袁紹はこれまで義勇軍である自分に何かと眼を付けてくれた言わば恩人。

だが、夜姫を袁術の陣に招き入れる事は伝えていない。

何と説明すれば良いやら……………」

「劉備。これはどういう事だ？」

袁紹は激怒している顔で劉備に訊ねた。

「袁紹様。どうなされたのですか？お気が些か荒いですが……………」

夜姫が袁紹の様子を感じて口を挟んできた。

「あ、いや……私は貴方様が袁術の陣へ行くとは聞いておりませ

んでしたので」

「それは先ほど決まった事なんです」

夜姫は袁紹の音がする方向に眼を向けて自分で説明した。

自分が居た天幕を敵に破られて、そこを袁術が助けてくれた。

そして袁術と劉備が意見を言っ  
て袁術の陣へ移動する事になったと  
．．．．．

「私が袁術様の陣なら安全と思  
い劉備様達も一緒に連れて来たんで  
す」

袁紹はそれを聞いて後悔した。

なぜその場に居なかったのだ？

そこに居て夜姫を護れば自分の陣へ来てくれたかもしれないのに、  
と．．．．．

しかし、それを声に上げて怒った所で夜姫が考えを変える訳も無い  
し寧ろ印象を悪くしてしまうと袁紹は短い間に考えた。

それに夜姫の様子からしても劉備同様に何が起こったのか分からな  
い顔をしていた。

劉備と袁術が口裏を合わせたとも一時は考えたがこの2人は水と油  
みたいな関係で決して交わらない。

となれば何れは陣を追い出される羽目になるだろう。

その時、改めて自分が行けば良いと袁紹は思った。

何より劉備には眼を掛けている。

出来るならば自分の部下にしたいとも考えているのだから、「ここは大しく引くべきと判断した。」

「劉備。袁術。夜姫様の身はそなた達に預ける。傷一つ負わせるな」

「言われなくても分かっている」

袁術は憎まれ口を叩くように言った。

「なぜ貴様はそのような態度を取る。子供ではあるまい」

「ふんつ。貴様に関しては別だ」

互いに睨み合い一触即発とも言える雰囲気になったが剣を抜こうとはしなかった。

それ以上に発展すれば夜姫が怒ると2人そろって解かっていた。

だから、口喧嘩に留めておく。

「では、袁紹殿。我らはこれにて失礼する」

袁術は馬の腹を蹴り袁紹の横をすり抜けた。

「袁紹殿。申し訳ありません」

劉備は袁術達が言ってから袁紹に謝罪した。

「本来ならば袁紹殿に伝えなくてはと思っておりました。ですが、何時またあのような事態になるとも限りませんし時間もありませんでした。言い訳とは思いますが、どうかご理解下さい」

「分かっておる。そなたと袁術が一時は口裏を合わせた、と思つたが・・・そなたはそのような器用にこなせまい」

袁紹は何処か皮肉気に言ってみせた。

「・・・・・・・・・・」

「まあ、私に何の相談も無く夜姫様の陣を決めたのは些か腹に来たが仕方あるまい。まだ時間はあるのだ・・・それに私の見方ではそなた達は何れ袁術の陣を再び出ると踏んでいる」

それに劉備は何とも言えなかつた。

「出た後は我が陣へ来い。丁重に持て成すからな」

「有り難きお言葉を・・・・・・・・」

「では失礼する」

そう言つて袁紹は自分の陣へと戻って行つた。

「殿。袁紹殿・・・少々怒つておりましたね」

諸葛亮が去って行く袁紹を見ながら劉備に小声で話し掛けてきた。

「ああ。しかし、何とか解かしてもらえたが・・・これからが大変だな」

袁紹は一時だけ自分と袁術が手を組んだと思っただけらしい。

実際当たりではあるが、出て行く事は考えていない。

共に夜姫を護る為に手を組んでいる。

もし、これが知られたら・・・

「その辺は私にお任せ下さい。それにしても敵は・・・夜姫様の存在を知っているのかもしれないね」

「ああ。二度も我々の陣を襲ったのだからその可能性は極めて高いと見て良いな」

自分達義勇軍は敵から言わせればよく戦う相手と取れるだろう。

だが、自分達を相手にするより総大将達の軍と戦った方が確実に名は上がる。

それなのに二度にも渡り襲ってきた事を考えると夜姫の存在が向こうにも知られている可能性が高いと見て良いだろう。

「殿。この選択は正解ですよ」

諸葛亮は劉備の選択を正解と言い、主人の心を慰めた。

劉備から言わせれば袁紹を騙す形となったから気を病んでいると思っ  
っていたのだ。

「ああ。分かっている・・・さあ、我々も追っぞ」

劉備の言葉に義勇軍達は頷き、急いで夜姫たちの後を追いつけた。

袁術の陣に到着した頃には既に夜姫たちは陣内へと入った後だった。

陣の外で劉備は兵に袁術の事を伝えると直ぐに通されたから問題は  
無かった。

陣内へと入った義勇軍である劉備達は改めて袁術と比べてやはり“  
格”という違いを感じられた。

木の杭が地面に刺さりそれを幾つも囲み馬が侵入できないようにさ  
れている兵たちの装備も整えられている。

おまけに食料・・・兵站なども整えられており自分達とは違う所が  
嫌というほど強調された気がした。

その中を劉備達は通るのだが兵たちの視線は何処か痛かった。

袁術が招いたとは言え、それは夜姫と言う天の姫が居るから。

・  
そうでなければこんな陣へ来れないと眼で言われた気がした・・・

一番奥……袁術の天幕には槍を持った兵が2人左右に別れて立っていたが、劉備達を見ると直ぐに奥へと消えて行き袁術を連れてきた。

「夜姫様が寝泊まりする天幕はあそこだ」

袁術は夜姫の天幕を指差し今度は劉備達の陣は直ぐ近くと教えた。

「それから宴の事だが……夜姫様は良いと仰った」

これからここで暮らすのであれば皆に自己紹介をしなければならぬ、と言ったようだ。

「そうですね……」

「うむ。宴にはそなたらも出てくれ。そうでないと夜姫様も不安だろうからな」

間もなく始まると袁術は言い劉備は兵達に陣へ迎えと命令すると関羽達と共に袁術の天幕へと入った。

既に夜姫はそこに一人で座っていたが、劉備の気配を感じると可憐な笑顔を見せた。

「夜姫様。遅れて申し訳ありません」

劉備は夜姫に遅れた事を詫びた。

「いえ。大丈夫です」

ただ、一人では不安だったと夜姫は語り傍に居てくれと頼んだ。

「畏まりました」

劉備は頷いた。

袁術が右を劉備が左に座り夜姫を挟んだ。

そして諸葛亮と典医がその左右を挟み、関羽と張飛が続く形となった。

それから直ぐに袁術に従う群雄達が天幕の中へと入ってきた。

群雄達は劉備達には見向きもせず夜姫にだけ挨拶をしていく。

夜姫としては我慢ならない物だが取り敢えず何も言わないでおいた。

「遅れて申し訳ない」

最後と思われる男の声がした。

「孫堅様ですか？」

夜姫が入ってきた男に声を掛けた。

「はい。孫文台です。遅れて申し訳ありません」

「いえ。気にしておりません」

謝罪する孫堅に夜姫は首を僅かに動かして問題ないと言った。

そして孫堅は群雄達の中で唯一初めて劉備達にも挨拶をした。

「劉備殿。またもや敵を追い払ったらしいですね？」

「ええ・・・まあ」

劉備は曖昧に頷いたが、孫堅には謙遜しているように見えた。

「そのように謙遜めされるな。貴方の行動は我が軍内でも称賛されているのですよ？」

義勇軍を引き連れて董卓の軍を2度に渡り撃退した。

これは称賛されて然るべきと孫堅は断言した。

「ありがとうございます」

「いえいえ。袁術様。御身体の方は大丈夫ですか？」

劉備から袁術に視線を向けた孫堅は傷の具合を訊ねた。

「問題ない。それより速く席に座れ。そろそろ始めるとしよう」

「はっ」

孫堅は直ぐに自分の席に腰を降ろした。

場所は夜姫から斜め右だった。

「では、これより宴を始めるとしよう」

袁術が手を叩くと部下達が酒の入った壺――“瓶子”を持ち天幕へと入ってきた。

群雄達は杯を持ち瓶子から注がれる酒を受け止める。

袁術の杯にも部下が注ごうとしたが、袁術はそれを止め自ら瓶子を持った。

「夜姫様は酒を飲めますか？」

注ぐ前に袁術は確認するように訊ねた。

「はい。飲めます」

「では……」

夜姫の答えを聞いてから袁術は酒を注いだ。

そして今度は劉備達に自ら注いでみせた。

それに群雄達は驚いたが「流石は総大将」と褒め称えた。

全員に酒が注がれた。

「あの、袁術様。私がやりましょうか？」

袁術は自分で注ごうとしたが、夜姫の言葉に手を止めた。

「夜姫様が？」

「はい。貴方様には護ってもらった恩がありますから」

これ位で恩を返せるとは思っていないと夜姫は言ったが袁術は子供のように笑い頼んだ。

「では、お願いします」

袁術は夜姫の右手に瓶子を持たせた。

少しばかり重いと夜姫は感じながらもたどどしい手つきで持つと袁術が差し出した杯に注いだ。

群雄達は羨ましいとばかりに袁術を見てから夜姫を見た。

瓶子を持ちたどどしい手付きながらも袁術の杯に酒を注ぐ夜姫の横顔は見ているだけで美しかった。

それを肴に酒を飲める事だろうと群雄達の一人は思ったほどだ。

「もう結構ですよ」

袁術が声を掛けて夜姫は瓶子を上を傾ける。

そして夜姫から瓶子を部下が受け取り下がった。

「では、諸君。改めて乾杯だ」

夜姫様が陣へ来た事に。

これからの戦いに。

『乾杯』

袁術が杯を掲げ飲んでから群雄達も杯を掲げて一気に飲み干した。

張飛などはあつという間に飲み干してしまい劉備に軽く叱られてしまったが。

夜姫の方は僅かに口を付けて一息入れた。

「少し強い酒、ですね」

「夜姫様には些か強すぎましたか？」

「多少は。でも、飲めない訳ではありません」

自分のペースで飲めば酔わない、と夜姫は答えまた口に運んだ。

その様子を群雄達は酒を口に運びながら盗見しているのが袁術には手に取るように分かった。

皆、夜姫の姿に見惚れている。

だが、それは単なる見た目だけの話。

自分も前まではそうだった。

『私も、あのような感じだったのだろうか……』

群雄達を見て前の自分に自嘲する袁術は杯を煽り酒を飲んだ。

直ぐに空になる杯に袁術は瓶子を取り注ごうとする。

「袁術様。お酒が無くなったのなら、また注ぎましょうか？」

夜姫が典医に導かれて杯を置くと袁術に問い掛けた。

「え？あ・・・では」

袁術は少しぼうつとしていたが、直ぐに頷きまた杯を傾けた。

典医に補助されながら瓶子を持った夜姫は袁術の杯に酒を注いだ。

「ありがとうございます。それにしても中々注ぎ方が上手いですね」

これは世辞ではなく何となく見ていて判った。

「あちらでは、学費を稼ぐ為に色々働いていたので」

「そうですね。学費を稼ぐのは並大抵ではありませんまい？」

「ええ。ですが、経験になりますから」

前向きな答えに袁術は感心しながら注がれた酒を味わいながら飲み始めた。

そして夜姫は劉備達に訊ねた。

劉備達もまたお願いすると夜姫は注いだ。

それからまた自分の杯に残っていた酒を飲んだが、張飛がお返しとばかりに酒を注いで来たので飲む事になったが自分のペースは守り続ける。

少しずつ時間を掛けて夜姫は酒を喉へ流し込んだ。

酒を飲むのは久し振りだった。

大学に入学した時の歓迎会と劇団の公演が終わってからの打ち上げの時だ。

最近酒を飲む機会など全くなく不安だったがペースを守れば問題ないと改めて思った。

酒を飲みながら耳に群雄達の笑い声と共に楽器の音色が入って来た。

その時、頭の中に景色が浮かんだ。

何処かの宮廷だろうか？

そこでは宴が開かれており楽器の演奏を肴に大勢の者たちが酒を飲んでる。

自分もまたそこに居たが、一番下座で誰にも話し掛けられず黙々と酒を飲んでいた。

ただし、自分よりペースは速いし量も多かったのが違う所だ。

それに何処か寂しそうな雰囲気もまた違つた。

しかし、酔つた者達が舞を披露しろと言つてきて仕方なく舞い始めた。

両刃で細身の剣を抜き扇を開き音楽に合わせて舞い始める。

何でそんな光景が浮かんだのか……

考えていると音色が耳に入つて来る。

懐かしい音色に思えて夜姫は無意識に杯を置き扇を取り出した。

「夜姫様？」

袁術が何かを感じ取り声を掛けた。

「剣を貸して」

夜姫の眼が……月の色へと変化している。

しかし、まるで魔術に掛つたかのように袁術は言われるままに剣を鞘から抜いて夜姫に渡した。

剣を右手で受け取つた夜姫は扇を左手に持ち音楽に合わせて軽やかな動きで舞を始めた。

袁術達は突然舞を始めた夜姫に驚いたが直ぐに魅了された。

剣で空を切り扇で風を寄せて舞う。

時には苛烈・・・時には繊細・・・時には慈悲・・・

まるで感情を出しているかのように夜姫は舞を続ける。

演奏する者もまた夜姫の舞に合わせるが如く演奏を続けた。

やがて音楽が終わると夜姫もまた舞を止め一礼した。

暫く誰もが言葉も何も出来ずにいたが、一人が拍手すると皆が拍手をした。

「お見事です！」

「素晴らしい舞でした！！」

群雄たちは拍手しながら称賛の言葉を投げた。

夜姫は茫然としていたが、孫堅が近づいて元の場所へと戻した。

「夜姫様。実に見事な舞でした」

袁術が夜姫の舞を心から称賛した。

「いえ・・・ただ、音楽が流れたら身体が勝手に・・・」

「それでも見事でしたよ。皆の者。夜姫様の舞は見事であったらうっ？」

袁術が訊ねると群雄達は頷いた。

それから飲めや歌えの文字通り宴と化した。

それに最後まで付き合う事になった夜姫だが、久し振りに楽しい思  
いが出来たと心の中で喜んだ。

## 第八幕：姫との約束

宴は夜遅くまで続いたが、夜姫が眠くなったのを機にお開きとなった。

夜姫は典医に連れられて先に天幕へと行きそれから皆がそれぞれの天幕へと引き上げた。

最後に劉備が出ようとした時、袁術が呼び止めた。

「少し話がある」

袁術の言葉を断る理由も無い劉備は一回だけ頷くと関羽達を先に行かせ袁術と二人だけになった。

「そなた・・・明日から我が軍と共に董卓軍と戦えるか？」

「はい。ですが私共は貴方様や孫堅殿に比べれば格段と兵力などに関しましては劣ります」

寧ろ義勇軍は義勇軍だけで行動を取った方が良いと劉備は言ったが袁術は首を横に振った。

「それでは色々と面倒だ。そなたらは私がここへ招いた・・・言わば客将だ」

「・・・」

「だが、部下達から見れば夜姫様に付いて来た従者のような存在だ。

もし、そなたらが勝手な行動を取れば部下達の反感を買う」

確かにその通りだ、と劉備は改めて思い直す。

自分達は夜姫の為とは言え袁術に招かれた存在……言わば客将。

招いてくれたのだからそれに担う働きをするのが客将の恩返しとも言える。

だが、袁術の言う通り傍から見れば自分達は夜姫に従う“おまけ”のような存在で決して両手を広げ歓迎する程の者達ではない。

そんな自分達が勝手な行動を取りあまつさえ戦果を上げてしまえば袁術の言う通り反感を買うのは必定だ。

だからと言って袁術の指揮する軍団に従っている訳にもいかない。

もし、そうならば召使いと思われてあれこれ命令されてしまう。

勇軍達もそう簡単に従うかどうかさえ怪しい……………

特に義弟である関羽は些か自分に対して自信を持ち過ぎている節がある。

その自信は……傲慢不遜と人には取れる程。

確かに関羽の実力は誰もが一目置き、その容貌に皆は圧倒されてしまふ。

関羽自身もその実力を知っており誰もが一目置いている事も知って

いる。

性質が悪いのだ。

恐らく義勇軍が一人で行動すれば恐らく関羽や張飛などは単独そうではなくとも何人かを引き摺れ董卓軍を蹴散らしてしまうだろう。

そうなれば必然と怨みを買うのは義勇軍の長である劉備だ。

「ここは大人しく私に従ってくれまいか？」

そなた達を追い出せば夜姫様が哀しむし一人になってしまう。

「前にも言ったが夜姫様を安心させられるのはそなただ。もし、そなた達が居なくなれば誰が夜姫様を安心させられる？」

劉備は今までの袁術とは違うと思っていたが改めて感じた。

以前の彼なら自分を蔑み、こんな言葉を言ったりしない。

だが、今は違う。

そしてここは袁術に従うのが一番と思った。

「分かりました」

「すまない。だが、恐らく二度もそなた達に撃退された董卓軍だ・  
・明日は本腰を入れて来るかもしれんな」

董卓自身は袁術よりも部下である孫堅を忌避している。

義勇軍である劉備は夜姫が居るから襲っているような物だろう。

だが、ここに移ったと何れは・・・もう知られているかもしれない。それを考えると明日は真つ直ぐにここへ攻め込む可能性が高い。

そうなれば乱戦となり指揮系統も滅茶苦茶にされてしまう恐れがある。

それだけは避けたい所だ。

「本腰を入れて来ると言う・・・呂布が来ると？」

劉備は袁術の言葉を聞いて誰が来るかと考えた結果・・・呂布が来ると推測した。

「呂布だけが何も奴の手下だけではないぞ」

確かにその通りだと劉備は呂布だけに捉われた自分を恥ずかしく思った。

「“華雄”かもしれん。“胡軫”かもしれん。そなたの言う通り呂布かもしれん。最悪の場合・・・奴等が全員打って出るかもしれん」董卓の配下には袁術がいった3人の人物が脅威と見て良いだろう。

華雄は董卓の軍では都督とくと呼ばれる軍政を指揮する立場に居る。

胡軫に至っては最初は陳郡太守だったが、後に大督護となり司隸校

尉になった。

呂布は董卓の養子にして中郎將に累進し更には都亭候に封じられ“飛將”名まで呼ばれている。

3人ともそれぞれの分野においては実力があるが、武勇に関してもいう事が無い。

「しかし、胡軫は呂布と仲が悪いですよね？」

「そうだ。もし、3人が一緒に来れば呂布と胡軫の仲を突くのが良い」

もし、来るならそこを突けば勝ち目があると袁術は言ったが出来るならば3人一緒には来て欲しくないというのが本心だった。

「どうなさるんですか？」

「何とも言えん。ただ、孫堅も居るからそれ程ではないと思うのだが……」

孫堅は袁術の部下だが実力から見れば彼の方が上だ。

だから、董卓は先ず孫堅を先に撃破すると考えている。

どちらにせよ難しい所だと袁術は言いながらも帰って良いと言い劉備を下がらせた。

一人天幕へと残された袁術の所へ閻象が劉備と入れ変わるように入ってきた。

「何か用か？」

「宴の後始末を。それから夜姫様の事についてです」

「何か遭ったのか？」

夜姫の事だと言われると眼の色を変える自身の主に閻象は眼を細めながら口を開いた。

「今はお休みになられております」

「では何だ」

「そう急かさないで下さい。急かす男は嫌われますよ？」

「煩い。それで何なのだ？」

「はい。先ほど閻者から連絡が入りました」

「・・・報告は？」

袁術は閻者と聞いて眼を細め誰も居ない事を確認した。

閻者を送り込んだのは袁術ではない。

目の前の閻象が独断で行った事だ。

最初こそ怒ったが今はその行いに感謝する。

「間者の報告によりますと敵は夜姫様の存在に気付いております」

「それで？」

何処かで気付いていたかと思っていたので然して驚かず続きを促す袁術に閻象は続けた。

「董卓は是非とも夜姫様を手に入れたいと思っっているようです」

天の姫を自らの懐に入れれば恐れる物は何も無いからだ。

「ふんつ。私利私欲に塗れた男の考えそうな事だ」

「ご自分も前までそうでしたでしょうに……………」

他人事のように罵倒する主に閻象は嘆息しながらも続きを話した。

「それで明日……呂布、華雄、胡軫を出すそうです」

「先ほど劉備とも話したが……来て欲しくない人物が一気に来るとは……………」

嫌な予感……希望ほど無残にも打ち砕かれる物は無いと袁術は改めて痛感させられた気がした。

呂布一人でさえ手間取るというのに3人纏めて来られては耐えられるか自信が無い。

「まったくです。ですが、ここであの3人を一気に……そうでなくとも誰かしら1人を打ち倒せば確実に揺さ振りを掛けられます」

閻象の言葉は確かに一理ある。

3人とも董卓の配下では猛者だ。

その者達を一気にそうでなくとも一人でも倒せば確実に向こうが怯むのは見えている。

「確かにそうだが・・・そなたとしては誰が妥当だと思う？」

「胡軫と呂布は仲が悪いです。貴方様もお考えでしょうが、その2人を先ずは引き裂き個々に撃破するべしと思います」

胡軫は呂布に比べれば武勇においては明らかに劣る。

しかし、それでも個人武勇は眼に止まる位の実力はあるのだが性格が傲慢で短気おまけに嫉妬深い。

これらが混ざり合い部下達の人気は極めて低い。

恐らく胡軫はなぜ呂布と共に参加しなければ？と憤りを覚えている事だろう。

華雄に関しては胡軫の配下だから、呂布との仲介に心を砕く筈だがそこをバラバラにすれば・・・

「確かにその通りだな。そなたが言うとなれば・・・もう出来ているのだから？」

閻象の性格からしてこれを自分に話すという事は・・・

・

「はい。既に手は打っております」

何でも無いように閻象は言ってみせた。

「抜かりは？」

「ありません」

「大した男だ。それから夜姫様の事だがくれぐれも粗相が無いようにな」

「その言葉貴方様にそっくりお返しします」

相変わらず一言多いし容赦ないと袁術は思いながらも怒りは不思議と起こらなかった。

「何をニヤケているのですか？」

閻象に指摘されて自分の顔に手をやれば・・・微かに顔がニヤケていた。

「いや何でも無い」

直ぐに顔を元に戻して閻象に命令した。

「明日は奴等が来るならこちらも準備をしておけ。孫堅にも伝えておけ」

「御意に。では、片付けをするので天幕から出て下さい」

袁術は頷いて天幕を出た。

夜は星空で広がっており明日は晴れと予感する。

夜姫の天幕を見れば屈強な兵士二人が槍を片手に立ち劉備の陣幕もまた兵たちが立っており夜姫の天幕を黙って見ていた。

「・・・・・・・・」

何故か無性に夜姫の所へ行きたいと思った袁術は静かに天幕へと足を向けた。

「これは殿」

天幕を護っていた兵たちは直立不動で袁術を見た。

「夜姫様は？」

「寝ております。歌声のように安らかな寝息です」

耳を澄ませれば確かに・・・歌声とも取れる安らかな寝息が聞こえてくる。

「入っても良いか？」

「はい、構いませんが・・・・・・・・」

兵たち2人から見れば袁術はここの主だ。

その主が何でこんな許可を求めるような言い方をするのか理解できなかった。

「ここは夜姫様の天幕だ。如何に私の陣とは言え、ここ“だけ”は夜姫様の領土。そなた達は差し詰めその領土を護る衛兵と言った所だ」

なら、その衛兵の許可を得なくては中に入れないと袁術は説明した。

2人は眼を合わせてから頷き合った。

『どうぞ、お入り下さい』

「すまん。それから・・・もし、私が何か夜姫様に対して“変な事”をしようと勘付いたら迷わず取り押さえろ」

寝ている女性の天幕へ入るのだ・・・何をするか自分でも分からない。

それでも入りたいと言う願望は我慢できない。

袁術は自分で解かっていたから敢えて部下に命じたのだ。

部下達は曖昧ながらも頷いたのを確認してから袁術は天幕の中へと入った。

蠟燭は消されているため真っ暗で何も見えない。

『・・・眼が見えない夜姫様にとってはこんな状況なのだろうな』

眼が見えないとなれば辺りは暗闇同然。

しかも以前は見えていたと言うことから性質が悪い。

最初から見えない方がある意味では助かるのだが、とつぜん見えなくなつたというところまで見えていた物が全て見えない。

これには言い知れぬ恐怖が宿されている。

常人ならば泣いて喚き散らすだろう。

それが当り前なのだが・・・夜姫はそれを微塵も表さない。

寧ろ眼が見えないのにひた向きに前を歩き続けている。

強い娘だと表術は思いながら暗闇に慣れた眼で寝台を探した。

寝台が見え誰かが寝ている事を確認する。

僅かに肩を動かしているから寝ている証拠だ。

足音を立てないように近付いて見下すと・・・・・・・・・・・・・・・・

『まるで赤子だな』

赤子のように無邪気な寝息を立てる夜姫が居た。

銀色と紫色の髪を惜し気も無く曝しており、暗闇でもよく見える。

スー・・・スー・・・スー・・・

寝ている夜姫は袁術が近付いたのにまるで起きない。

袁術は黙って夜姫を見続けた。

明日は呂布達が来る。

そして自分達はそれを迎え討つ。

大勢の血が流れ命を落とす者が続出する事だろう・・・

自分もまた死ぬかもしれない。

これが見納めかもしれないと思ったが、直ぐに否定した。

自分は死なない。

一度は死に掛けた身だが、夜姫に救われた。

血を流す自分に対して夜姫はこう語り掛けた。

『私を護って死ぬるなら本望？・・・死んだら終わりでしょ？生きて私を護り抜いてこそ本望と言いなさいよ・・・馬鹿』

「夜姫様。お約束します」

袁術は眠る夜姫に語る。

「私は生きて・・・例え泥水を啜ろうとも生き続け貴方様をお護り

します」

貴方は生きて護り抜いてこそ本望と言え・・・そうおっしゃった。

ならば、そのように生きて貴方を護り続けましょう・・・

「この身は・・・貴方様だけの為に・・・」

そう言い残し立ち去ろうとした時だ。

「・・・やく、そく・・・だからね・・・」

眠っていた夜姫だが声を発して来た。

起きたのか？と思い振り返ったが起きていない。

・・・夢を見ているのだろう。

まさか自分の言葉に反応したのかとも思ったが。

「やく・・・そくは・・・守って、ね・・・」

「・・・はい。お約束します・・・夜姫様」

眠る夜姫に袁術は笑顔で頷いた。

「良い夢を・・・」

袁術は僅かに顔を緩めて静かにまた天幕を後にした。

「二人とも・・・何があろうと夜姫様を護れ」

『・・・御意に』

兵は袁術の言葉に直立不動のまま頷いた。

そして天幕から離れた袁術は自分の天幕へと戻りながら夜空を見上げた。

とても澄んだ夜空は幾多の星々が輝きを放ち続ける。

「夜姫様は天ではなく・・・月から来たのかもしれない」

この星空が輝きを放つ中でも一際輝くのは月だ。

あの月から夜姫は来たのかもしれない。

もし、そうなら・・・

「いや、止めておこう」

袁術は自分の考えを否定し今度こそ自分の天幕へと足を傾けた。

## 第九幕：励ましの言葉

董卓が呂布、胡軫、華雄の3人を陽人から出撃させた情報は早朝の内に連合軍の陣内に広まった。

呂布だけでなく胡軫さらに華雄まで出撃するのだから皆は恐れ戦く。しかし、彼等を倒せば・・・そうでなくとも1人でも倒せば名が天下に轟く事は間違いない。

恐怖と巧妙という2つの心が混ざり合いながら皆は戦闘準備に掛った。

袁術の陣もまた同じ事だった。

兵たちは鎧の結び目をきつく縛り戟や槍、弓、弩、盾などの点検をしている。

誰もが恐怖と巧妙の心が入り混ざり合っているが、やはり恐怖の方が強いのだろう。

天に向かって祈りを捧げる者・・・家族から渡された物を握り締める者・・・など様々だった。

義勇軍の方を見れば全員が無言で武器などの手入れをしていた。

彼等は怖くないのか？と訊きたいが、彼等も人間だ。

怖いに決まっている。

しかし、恐怖に打ち勝とうとしているように見えた。

自分達は義勇軍だが、天の姫が降り立ちそれを二度に渡り敵から護り抜いた実績がある。

今回も必ず何があるうと天の姫を護り通す。

そんな気持ちが彼らにはあり無言で居るのだ。

彼等は無言で天幕に眼をやった。

そこは夜姫が眠る天幕だった。

その天幕には夜姫以外の者達が居る。

夜姫を上座に据えて将達が集まっている最中だった。

袁術と孫堅は勿論だが劉備達も居る。

ただし、居るのは劉備、関羽、張飛、諸葛亮の4名だけでどうしても袁術や孫堅に比べれば全てにおいて見劣りしてしまう。

将たちの中にはなぜ義勇軍が？と目くじらを立てる者も居たが、袁術が咳払いをすると慌てて夜姫に視線を戻した。

「夜姫様。今日の戦は呂布が出ます」

袁術は夜姫に呂布の存在を伝えた。

「飛将と言われる呂布ですよ？あの一日を千里で走り切ると言われる駿馬“赤兎馬”に乗っているのですよね？」

夜姫の言葉にはそんな人物を相手に勝てるのか？と暗に問い掛けているのを袁術ならびに劉備は知っていたが敢えて言わなかった。

彼女の言いたい事は解かる・・・だが、ここで逃げる訳にはいかないのだ。

「呂布だけでなく更に胡軫と華雄も出撃しています」

答える代わりに更に2人追加する袁術に・・・・・・・・

「・・・・・・・・」

夜姫は何も言わなかった・・・言えなかったのだ。

3人とも董卓の配下である将で腕利きの猛者だ。

特に呂布は三国の中でも一番強いと言われる程の実力者で愛馬の赤兎馬もまた名馬として知られている。

「董卓の狙いは・・・貴方様です」

袁術は無言の夜姫に対して董卓の狙いを伝えた。

「私が、天の姫だから・・・ですよ？」

もう嫌になったと夜姫の声には含まれていた。

誰だって天の姫という理由で近付き、気に入られようとしている。

それを夜姫は嫌というほどここに来てから体験しているから董卓が狙っていると言われても驚かなかった。

寧ろ諦めているように感じる。

「夜姫様。お辛いでしようが我慢して下さい。そして願わくば・・・我々に貴方様の加護を」

「私の加護？」

夜姫は袁術の言った言葉が理解できなかった。

「はい。天の姫である貴方様の加護を・・・そうでなくとも励ましの言葉を言って下されば我々は全力で・・・いえ、それ以上の力を発揮します」

袁術の言葉にその場に居た将達は頷いた。

「・・・・・・・・・・」

無言になる夜姫だが、内心では疑問を覚えていた。

『私なんか励ましの言葉で良いの？』

自分はただの大学生で天の姫などではない。

だが、それを言った所で目の前に座る者達は信じないだろう。

それよりも自分が励ましたからと言って必ず生きる訳ではない。  
殺される可能性だってある。

それなのに励ましの言葉など掛けた所で焼け石に水だ。

寧ろ・・・彼等を失望させるのでは？という気持ちが強かった。

『どうすれば良いの・・・・・・・・・・・・？』

誰か教えてくれ、と夜姫は助けを乞いたかった。

そこへ・・・また夢で見た光景が頭の中に浮かんだ。

自分の前には大勢の兵たちが直立不動で立ち、自分の言葉を待っていた。

総大将である自分は迷っていた・・・・・・・・

自分が何かを言った所で彼等の内・・・誰かは確実に死んでしまう。  
・・・無論自分だって死ぬかもしれないが彼等の方が確率的には高い。

死神の手に持たれる鎌で殺されてしまうのだ。

そんな彼等に励ましの言葉など掛けて何になる？

だからと言って何も言わないでおけない。

何を言えば良い？

頭の中に浮かんでくる“昔の自分”と今の自分は同じだった。

ただじつと前を見つめ考えている。

何かを迷っている時は髪を右手で撫でる仕草は瓜二つだ。

考えに考えた末・・・放った言葉は・・・・・・・・

「・・・私が貴方達の魂を抱き締めて上げます。獅子奮迅をした者には私から口付けを差し上げましょう」

ずっと考えて考え抜いて放った言葉はこれだった。

励ましの言葉など彼等に言った所で無意味。

ならば、彼等が勇敢に戦えるように・・・死んでも悔いが残らないような気持ちになれる言葉を放とう。

そう思いあの言葉を言った。

言葉を放つと夜姫の空虚な眼差しが・・・金色へと・・・“月”の色へと変貌し纏っていた気が急激に変化した。

声も先ほどまで怯えていたのが嘘のように凜としており、同時にとても重みがあり説得力があり聞く者を魅了した。

『この気は・・・・・・・・』

袁術はこの気に覚えがあった。

敵に斬られ死にそんな自分へ夜姫が手を差し出して言葉を放った時の気だ。

月の瞳もまた同じだった。

劉備達もまた夜姫の様子が可笑しい事に気付いて近づこうとしたが、夜姫は更に言葉を紡ぎ続けた。

「貴方達の内何人かは・・・兵達も幾人・・・幾万と死んでしまうでしょう。それが戦争と言葉では簡単に言えますが、現実はそのような簡単な物ではありません」

言葉では戦争なのだから人が死ぬのは当たり前、と簡単に言える・・・表せる。

しかし、現実はこの簡単な事ではない。

剣で、槍で、矛で、弓で、斧で、メイスで、ハルバートで、フランベルジュで、銃で、手で、足で、馬の蹄で・・・肉片と化するのだ。

身体から血が溢れ出て大地を赤く汚し、親しい者達の眼からは留め無く涙が溢れる。

そして互いに憎しみ合う。

どちらかが倒れるまで・・・どちらかを倒すまで戦い続ける。

それが戦争なのだ。

「死んでしまえば肉体は滅び何れは消滅してしまいます。親しい者たちは泣き崩れます。そして何れは名すら忘れ去られてしまうでしょう……ですが、魂は何時までも残ります」

肉体は滅ぶが魂は永遠に不滅。

ならば……

「私が戦場で散って逝った魂……“エインヘリヤル”たちは全て抱き締めましょう。そして私の治める都……“グラスヘイムのヴアルハラ”に勝るとも劣らぬ都へと連れて行きましょう」

戦場で死んでしまい不幸と言う者も居れば本望という者も居るだろう。

そんな者達も全て……全員を自分が抱き締め都へと連れて行く。

それが自分に出来る償いだ。

「誓って言います。貴方達が戦死したら……その将としての魂は私が抱き締めて上げます」

恐れても良い……寧ろ怖がりなさい。

生きたいと思いなさい。

故郷に愛しい者が帰りを待っているというのならその為に戦いなさい。

それでも……死んでしまったのなら私が責任を持ち都へと連れて

行きます。

それが私に出来る貴方達への恩返しであり罪滅ぼしだから……

『おおおおお！我らが姫君の為に！我らが舞姫の為に！我らが主の為に！！』

最後まで言い終えた夜姫の頭には兵たちの雄叫びが木霊していた。

兵たちは武器を掲げ自分に対して声を上げて叫んでいる。

……そして戦場へと向かったのだ。

「お……おお……」

誰かが掠れた声で口を開くと連鎖反応の如く他の者たちも口を開いた。

『お……おお……おおおおお！！』

皆は口を揃えて手を高々と掲げて雄叫びを上げる。

その雄叫びは出撃した敵軍の最奥にまで聞こえるほど凄まじい雄叫びだった。

敵の最奥にまで聞こえるほど凄まじい雄叫びだから味方の方は大地震でも起きたかのような錯覚した。

「皆の者、聞いたか？我々は例え死んでも夜姫様に抱き締められ都

へと誘われるのだ。例え死んでも悔いはあるまい？何を恐れる？」

袁術は腰を上げ将達に向かって問い掛けた。

「否！何も恐れる物は無い！！」

『何も恐れる物は無い！何も恐れる物は無い！！』

将達は袁術の言葉に叫び返す。

「出陣だ！！」

袁術が剣を抜き入口を指すと将達は勢いよく出て行った。

天幕に残ったのは袁術と劉備だけだった。

「・・・夜姫様」

上座に座り些か顔を紅潮させる夜姫に袁術は声を掛けた。

「わ、私・・・」

夜姫は自分が何を言ったのかよく理解できていない顔をしていた。

月の瞳も元へ戻り雰囲気も戻っている。

その様子を見て2人は安堵した。

「何も言わないで下さい。貴方様の言葉で将達は奮い立ちました。それで良いのです」

例え彼等が死んだとしても彼等はそれを本望とするだろう。

貴方様が抱き締め都へと誘うのだから。

「でも……………」

「夜姫様。袁術殿の言う通りです。貴方様は将達を叱咤激励しました。それに自信を持って下さい」

そして……待っていて下さい。

「私は貴方様を護ります。義勇軍もまた同じです。彼等もまた貴方様の言葉を聞き奮い立っております」

相手が呂布だろうと彼らなら倒せる……討ち破れるだろう。

「夜姫様はここでお待ち下さい。必ず帰って来ますから」

そう言つて劉備は天幕を後にし袁術もまた劉備と同じ言葉を述べて天幕を出て行った。

一人残された夜姫は一体なんであんな言葉を言ったのか？

しかも、ヴァルハラに勝るとも劣らぬ都へと誘うとは？

ヴァルハラは北欧神話に出て来る都だ。

地上で一番見事と言われる宮殿であるグラス Heim……喜びの世界にある。

戦で戦死した者達をヴァルキュリア……戦乙女が連れて来てラグナロク……“神々の黄昏”に備える為に用意されたのがヴァルハラだ。

ヴァルハラとは戦死者の館を意味する。

そんな所に勝るとも劣らぬ都とは一体……

「私は……一体……誰なの？」

誰も居なくなつた天幕に残された夜姫は自分が何なのか分からなくなつた。

“今はそれで良いんだよ。姫さん”

誰かの声がした。

しかし、誰にも聞こえない。

“今は、大いに悩みな。自分が何者なのか？一体どうしてここへ来たのか？”

大いに悩み考える。

“何れ答えは自然と出て来る。だが、今はまだその時ではないんだ”

その時が来るまでは大いに悩み考え続ける。

“今回もまた無茶をさせるが……姫さんなら大丈夫だ”

彼等が・・・英雄たちが居るのだから。

“俺達はまだここには来れない。だから、あいつ等が俺たちの代わりとなる”

英雄と言われる彼らだが・・・今の彼らでは些か役不足かもしれない。

“だが、姫さんが居ればあいつ等は変われる・・・いや、変わる”

今は2人だが・・・

“後1人・・・いや、後2人は変わる。この時点での話だが”

それはこれからもまた増え続けるという事か？

“あいつらかが変わる鍵は姫さん自身が持っている”

例えて言うと彼等は鍵穴だ。

その閉じられた扉を開くには鍵が必要だ。

“鍵は姫さん自身。少々危ない眼に遭うだろうが姫さんなら大丈夫さ”

理由は・・・

“賭け事に関してはここぞという所で運に恵まれているからな”

声の主は昔を思い出すかのように懐かしい口調になった。

“俺も含めて皆口を揃えてこう言ったぜ”

『姫様と賭け事をしてはいけない。身包み全て剥がされてしまうから』  
『ら』

“その通り・・・全員を素っ裸にしたからな”

あれは酷かった、と声の主は笑い出した。

“嗚呼・・・懐かしいぜ。また昔のように姫さんと戯れたいぜ”

皆がそれを願っている。

“あの糞餓鬼が余計な事をしてくれたせいで姫さんの覚醒が遅れたが・・・今度は問題ない”

一度目はあの糞餓鬼と称する者が余計な事・・・愚かな行為をしたせいで無駄に終わったが、今度はその者は居ない。

“姫さんは未だに糞餓鬼を大事に想っているようだが・・・直ぐに忘れるさ”

何故ならここでの戦い・・・連合軍と董卓軍の戦いが終われば・・・  
・・・

“三国の時代へと突入するからな。龍の坊ちゃんには契約通り茨の道を歩んでもらうが、それで良いんだ”

しかし、それは既に想定内の事であの契約は言わばそれを確実に歩ませるためであり確認の為でもあった。

“ いやはや人間なんて欲の皮が突っ撥ねた獣だと思っっていたが龍の坊ちゃんも例外だな。そこを見込んで落ちた姫さんも流石だ”

恐らく未だに力が完全に芽生えていないから無意識だろう。

だが、それでも誰が一番良いかを見極めるその慧眼・・・見事と言える。

“ 龍の坊ちゃんは蜀を建国する。そこで『坊や』と出会う。そうすればあんな糞餓鬼なんて直ぐに忘れるさ”

仮にこの舞台に入っ来てても・・・

“ しかし、分からないな。どうしてあんな何処にでも居るような凡人を好きになるんだ？ 姫さんがその気になれば世の男共を全員物に出来るというのに”

声からは信じられない又は趣味が悪いと言わんばかりの色が含まれていた。

よくもまあ、他人の好みに対してこうも口酸っぱく・・・毒を吐けるものだと聞く者は思うだろう。

“ まあ、他人の好みは解からないが気を付けるよ？ あんな凡人の権化みたいな男を好きになつたんだ。他の野郎共もとい女も含めて黙ってないぞ？”

過去にもそんな事が起こったのだろう・・・声から察するにかなり苦勞したようだ。

“爺なんて『姫様が結婚するなら腹を切る』と言って憚らなかつたんだ。今回もそうなるぜ？いやもつと酷くなる可能性があるな”

それを思うと心勞で倒れそうだと声は言いながら最後とばかりにこ  
う言った。

“まあ、頑張ってくれ”

その言葉を最後に声は途絶えた。

それとは別に合戦の合図である太鼓が鳴らされた。

陽人の戦いが始まったのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6881u/>

---

月の姫と英雄たち

2011年10月9日13時49分発行